二重にも三重にも、利益を貪らんとする複雜なる營業法、場所柄に反比例したる傳習的道德の存在、優勝劣敗、弱肉强食の狀など、吉原遊廓は考ふべく研究すべき大材料に候。花里の色香に迷つてのみ、吉原に出頭沒頭すると認められては、不本意千萬の限り也。

其の內お閑もあらば、一夜御來訪を乞ふ。小生の吉原觀なるものを開陳して、人道問題、社會政策に及ぶべく候。匆々、右御返事のみ。

S兄、先夜は失禮いたし候。あれから一人て以て、××樓へ行つたとは、其の豪勢、羨望に價す。四十になつても、兄や眞に衰へず。

花里にも逢はれた事と思ふ。四五年も女郎を勤めて居る女は、身體が全體に蒼白くなつて、筋肉の張もゆるんてしまひ、髮の毛は艶を失

つて脫け出す。眼の周圍は薄黑くなる。人を見る態度と云ふものが、何事にも疑ひ深くなつて、冴え〳〵とした調子を失ふものだが、我が花里に限つて夫れが無い。何時見ても調子が好くて、少しも屈托氣の無い所は、小生が傾倒して居るのも無理はない、と思はれ候や。小生は兄の花里觀を、樂んて聞かんとする者に候。

然し、さすがに籠の鳥の女に候。風雨の一日、あの女の部屋にて、箪笥の抽斗から手文庫や寫眞箱を取出して、彼れ是れと眺めて居る內、ふと一枚の白紙に大切らしく包んだ寫眞の樣な物を發見いたし候。其の時、花里は顏色を變へて、

「そればかしは、見て不可い……」

と、奪ふ樣に膝の下に隱し候。斯うなると尙見たいもので、小生も顏

色を變へて、

「昔の戀人の寫眞だらう、片思ひの……」

と言つて遣ると、女は顏を紅くして、

「戀人ぢやないけれど、片思の人……」

と自暴氣味に言つて、其の紙包みを投げ出し候。投げ出されて見ると、最う見る氣も半分失せて、寢そべりながら包を開くと、中から一枚の寫眞と一枚の繪はがきが現れたり。其の寫眞は、七八年前に撮つたらしい伊井容峰の素顏の半身で、繪はがきは容峰の扮した川島武男と、喜多村綠郎の扮した浪子とが、逗子の不動堂で別れを惜しむ所に候。

「こんなもの、そんなに大切なのかい」

「えゝ、伊井さんは妾の戀人なんてす。十七八の素人の時から、妾、

伊井さんに岡惚れしてたんてす。此の寫眞の伊井さんに……」

S兄、新造や下新なんかは、總見とか何とか云つては、好きな芝居を見る機會も、月に二三回は有る由なれども、籠の鳥の女郎が身ては、芝居見物など思も寄らず。夜毎に變る仇枕、お客の口から種々の噂を聞いて、それて僅に慰めるのみ、考へて見れば可愛相に候、不憫なものに候。

大概の女郎の部屋には、美人の繪はがきを額にして、明け暮れ眺めて居るのを見受け候。吉原と云ふ小さな一區廓に押込められて、世の雨風と遠く隔つて居れば、女郎は何事も受身にして、それだけ弱味が多く候。お茶を引た藝妓の心細さよりも、お客の無い夜の女郎の味氣なさや、如何ならんと思ひ遣られ候。

花里の様な、勝氣な陽氣な女にも、人知れず包み隠す「寫眞」の哀話あり。彼等は身體の自由を失つて居るのみてなく、心の自由をも囚はれたる女に候。男に荒んて、男を何とも思つて居ない女郎にも、「戀の饑餓」は淺からず。女郎は數多い女の中て、最も不幸にして、また最も幸福なる者と存じ候。

取止の無い事のみ、近日拜眉を期し候。

A君、花里から「みゝずのたはごと」を送つて下さい、と云つて來た。「徳富健次郎」と云ふ著者の名を聞いて、「不如歸」を思ひ出したんだらう。「不如歸」の様に、痛ましい涙の戀を描いてあると思つたのであらう。新橋堂て買つて、一冊早速送つて遣つた。

君は變な女だと云つたが、全く花里は女郎にしては、變な女の最も變な物てある。小學校を卒業した丈けだと云ふが、手紙も相應に書くし、新小說、婦人世界、講談物も讀むし、新しい小說なども讀む。紅葉とか鏡花とか、青々園とか默禪とかは、彼等の話題になつた所で、別に不思議とも何とも思はないが、花里は能く新しい作家の名を云ふ。谷崎潤一郎とか、長田幹彥とか、岩野泡鳴とか、正宗白鳥とか、森田草平とかは、花里が好んて語る名前てある。泡鳴をアワナリと云ひ、白鳥をシラトリと云つたから、笑つて遣つたら、先生極りの惡い顏をして、悄氣た事もあつた。

僕が小說好きだから、花里とは話が能く合ふ。

「近頃の小說は、ちつとも面白く無いのね。讀て居てもハラ〳〵して、

何だか苦しいわ」

などゝ云つて居た。僕は紅葉や美妙の書いた小説は、皆ウソなんださうな。近頃の小説は、人間の心の底のホントの事を書くんだ、と説明して遣つたら、

「それが、自然主義と云ふんですか」

と云つて笑つた事もある。花里は君が變な女だと云つた通り、如何にも女郎にしては變つて居る。話をして居ても、少しも花魁らしくなく、娼婦と云ふよりは、母婦に生れた女らしく見える。何時も活々として、何も彼も悟つたらしい様子をして居るが、時にはヒドく考へ込んで、吐息をつくことがある。お職でも張る様な女だと、女郎を立派な一つの職業の如くに心得て、見えを張つたり威張り散らしたり、立膝なん

かして毒付くものだが、花里にはそれが無い。娼妓と云ふ一階級が、婦人界に於ても、世間に於ても、如何なる地位にあるか位の事は能く心得て、折々我と我が境涯を果敢しとも思ひ、淺間しとも思つて、苦しみ悶へる事があるらしく見える。

A君、花里にとつては、金を湯水の様に費やす大盡さんよりは、自分を知つて呉れるお客の方が、何の位頼りになるか知れない。自分と云ふものを、女郎扱ひにする男よりは、女郎としてゞない、生れた儘の女——山村さと——として取扱つてくれる男の方が、何の位頼母しいか知れないのである。

花里には三人の馴染がある。深川木場の材木屋の大番頭と、本郷西片町の先生と、京橋彌左衛門町の吉村さんと。金のある大番頭は、齢

四十五六にもならう、髭の生えた先生は、三十八九のスラリとした美男子、色の白い吉村さんは三十四歳。この三人が三ッ巴になつて、一人の花里を取巻いて居る。

「みゝずのたはごと」を讀んだ花里の所感如何。その内、一所に行かうぢやないか。失敬。

Y兄、久しく御不沙汰に打過ぎ居申候。會社の用事にて、長らく九州地方を旅行いたし居り、一昨夕歸京、久し振りに東京の空氣に觸れて、何とも云へぬ心嬉しさを覺え候。

花里を妻に娶る件に就き、いろ〳〵御厚配御禮の言葉も無御座候。昨夕、久し振で××樓に參り、本人が最期の覺悟を聞き候處、一年の

後まで、生きて居るやら死んで居るやら、一寸先は闇の世だなど〳〵申して、頓と眞面目な話が出來ず。小生も馬鹿らしくなつて、暫くこれを歳月に委ねる事に斷念いたし申候。

如何に風變りの女と申しても、五年の長さを男の肌に荒んだ女なれば、妻として如何なるべきか、大に熟考を要する儀と存じ候。本人は年期が明けさへすれば、一文も御厄介は掛けずして、引取つて貰へる樣にしたいと申し居り候も、そんな譯にも參り申す間じく、殊に世間の思惑、同僚の手前、直ちに花里を妻にとは、考へものとも存ぜられ候。

一年の後に至りて、二人の情思に何等の變化なくば、其の時の話にいたし候も、決して遲きに非ず。昨夕の所見に據れば、花里近來大に

酒を嗜み、其の言動、何となく捨ばちの調子を帶び來り候。何うせ一度は斯る女の經ねばならぬ、一つの關所なるべきも、花里にしては餘りに遲い變化に候。何時もは小生の酒を、控へ目〳〵にと調子を取つたものが、近頃は自分から進んで、日本酒、ビールの滿を引いて、醉うて新造衆に當り散らす樣、我が親愛なる花里も、段々花魁かぶれがして來たのを悲しむ者に候。

こんな類の女といふものは、相手の男と面と向つては、何でもない顏をしたり、素振をしたりしても、男の友人など第三者に向ふと、如何にも相手の男を思つて居るとか、懸想して居るとか云ふ風に見せかけるのが、殆ど其の常套手段に候。花里と小生とは、戀仲としては露骨に過ぎるほど、何も彼も知り盡した仲なれば、今更第三者の兄等に

向つて、小生の事を思はせ振りに彼是云ふ筈もなく、又云つた所で一々取上げる兄等でも無しと存じ候。されば花里と小生との件は、少年少女の痴夢でも取扱ふ樣に、こゝ暫く不問に附せられたく、二人の事は二人にて處理いたすべく候。それが責任でもあり、義務でもあり、又、兄等に對する二人の申譯かと存じ居り申候。

小生も齡が齡なり、國許には一人の老父あり、早く呼び迎へて家を成すの要あり。妻帶は目下の急務なれども、今暫くの間花里の傾向を見て居る積に候。あんな類の女は、如何に母婦らしく出來て居ても、家庭の人として適當なるや否や、考へるまでも無し。酒興の上にて相知るに至りし一女性を、妻にまでと思ふに至りし小生の痴愚、御憫笑被下度候。

「名代部屋の客」だと申して、樓内の者等が笑話の材料となせし小生が、本部屋の客以上に傾倒せしを見ては、彼等も事の意外なる發展に、驚いた事と存じ候。小生も何時の間にか、期せずして深味へ入つたものに候。

御近狀如何、草々不一。

O君、近頃新しい女の一人を囚へたと云ふぢやないか。お目出度う、大に若やいて發展し給へ。

私も彼の女と妙なハメになつて、變な心理狀態の幾日かを送つて居る。二十歳代の四五六と云つた頃は、戀をするのも一つの事業で、其所に感興が伴つて居たけれど、三十も最う四五と云ふ中年になつては、

戀も大きな重荷になつて、苦しい汗が流れるばかりである。

それでも樂しい休息場はある。金が物云ふ廓では、お互に敗殘者の部に屬する方だが、彼の女の樣な變り者を相手にして居さへすれば、そんな氣骨も折れなくて宜い。女郎と云ふものは不憫なもので、數多い男の中から、好き不好きを選る譯に行かず、買はれた男の中から僅に好い人を見出して、それに全力を注がうとする。其の點になると藝妓なんかは自由なもので、不見轉專門の他は、厭な男に身を任せる樣な事をしなくても濟む。藝妓の戀がビールなら、娼妓のは灘の生一本、華やかでは無いが、しんみりとした味が深い。

ほんとの情は、藝妓よりも何よりも、女郎の方が深い。それもさうだらう。女を何しやうとすれば、廣い東京に何一つとして事缺かぬ中

に、わざ〳〵吉原三界まで出掛ける必要は無い。藝妓連が墮落した上に、私娼の群は市内の至る所にも出沒して、吉原よりも安價に、簡易に、平明に、男の慾望を充たしてくれる。そんな世の中に、時間と空費とを惜まずに、吉原遊廓まで出掛けるのだもの、少し道理の判つた女郎になると、吉原に遊ぶ男を特志な方だと云つて、歡迎するのは當然である。

「新橋、赤坂、下谷、濱町、蠣殼町、十二階下と、お關所が澤山あるのに、能く入らしたわねえ」

などゝ云ふ言葉を、能く新造衆から聞く。こんな事の判つて居ない女郎でも、一つ家に五年も六年も押込められて、浮世の波風を知らずに過した輩は、自然の傾向として、男を懷しむ情が深い。好厭は別とし

て、同じ男が初會から裏、裏から馴染となつて、逢ふ瀬の度を重ねる間には、眞の情愛も萠して來て、遂には離れ難ない仲になるのが多い。彼の女と私とが、さうした仲だとは云はないが、さうした傾向になつて居る事だけは事實である。

O君、戀も大詰の幕を見る樣になつても駄目だ。何時も華やかな、海のものとも山のものとも判らない、三四幕目の頃が一番宜い。夫婦になつたとか、金の工面が何うとか、世間體が何うとか云ふ樣になつては、戀も夢現的から實世間的になり、空想的から打算的になつて、興會の過半を失つて了う。花里と私が、恰度さうした場合に遭遇して居る。斯うなると、戀も苦しい大きな重荷である。

君は新しい女を得た。私は古い女を得た。君のはこれからだけれど、

私のは段々終局に近づいて來た。其の終局も、喜劇か、悲劇か、自分で自分の行末が判らない樣な氣がする。

自重してくれ給へ、私も自愛する。

「下」花里に送つた手紙

電話をかけるのだけは、少し遠慮して貰ひたい。會社の給仕などが、ひやかして困る。

最う行くまいと思ふけれど、酒を飲て醉ふと、何時でもお前の事を思ひ起す。ほれてる筈は無いのに、おかしいぢやないか。

花里と云ふ女は、馬鹿だと思ふ。花魁の癖に廂髪なんかに結つて、素人らしい事ばかり云つて居る。今の時節だから宜い樣なものゝ、お

客がお客だから好い樣なものゝ、昔の遊君はそんなんぢやなかつたさうな。少しは、花魁らしい氣持になつて見ては何うか。

お前より美しい女も澤山居るし、お前より親切な女も澤山居るのに、何うしてお前の事が忘れられないだらう。お前を馬鹿だと云つたが、俺も餘程の馬鹿だなア。何時も醉つてばかり行くから、大酒飲みと思ふか知らないが、酒でも飲まねば全く遣り切れないからなア。酒を飲て居る間だけは、不平も不滿も忘れて居て、天下が頗る太平なんだよ。

先日、歸途に借りた一圓、別封で返上する。利息は又の日に出す事にして、婦人世界を一冊、別便で送る。お前の好きな下田歌子女史が、何か大に論議して居る樣子、能く讀て少しは怜悧にならなくちや、何時まで花里さんの花魁でもあるまい。鏡を見るべし。

社の用にて九州へ行くかも知れない。當分逢へないかも知れない。

俺が行かなくても、木場と西片町で、景氣の好い事だらう。

お清どんにも、電話を遠慮すべし、とな。

先日、Sさんが一人て行つた晩、下宿の二階に寢そべりながら、御身の事を思ひ浮べ候。

部屋が空いて居ないので、何時もお氣の毒だと云ふが、私はお前の部屋が大嫌い、箪笥やら長火鉢やら、衣桁の置いてある彼の部屋が、何だか嫌で堪らない。女房を持つた所で、お清どんの樣な氣の利いた女中も置けまいし、それに世帶を持つた所で、お前の部屋ほどの生活も出來ないと思ふと、夫れが厭て堪らない。矢張り「名代部屋の客」

は、私の人柄に相應して氣が詰まらなくて宜い。

西片町よりは、木場の方が太ッ腹らしい。お前が身を任して幸福なのは、唯木場の番頭さんあるのみだ。齡は三人の中て一番上だけれど、彼んな人の方が、氣樂て宜いかも知れん。私なんかは、お前が空飛ぶ鳥になるまての間、友達交際をするに過ぎぬ。お前が何れほど思つて〻れ樣が、私が何んなに思つて見ても、二人は夫婦になどなれる仲てない。さう思ふと、行く先が見え透いた樣て、色も香も無いけれど、私はほんとの事を云ふ。死んでも西片町や名代部屋なんかと、夫婦にならうなど〻思つては不可ない……。

お客は大切におしよ、お前の樣な女にても、惚れる男があるのは、有難いと思はなくちや不可い。身は賤うても、心は清く高く持つて、

濁り江の臭味に溺れ無い様にね。生意氣云ふ様だけれど……。

その内に、また醉つて參るべく候。

拜復、度々の御手紙、拜見いたし候。

病氣したとのこと、餘り稼ぐからでは無いか。時節柄、御自愛專一に祈り候。

會社の方でも、小生のこと大分問題になつて、御身との仲に就いても、取沙汰がある様に候、何と云はれても詮方なし、當分謹愼して行かぬ様にする積なれど、心も身も御身に囚はれたか、考へて見るまでもなく、不思議なほど、心持が變になつた様に候。

絶世の美人と云ふても無く、稀有の妖婦と云ふても無いに、花里と

云ふ女は、不思議な魔力を持つて居り候。手練手管などに乘る様な小生でもなく、又月並の手練手管でお客を抱き込む様な、そんな花里さんでも無いに、男は身も世もなく打ち込み候。

岡惚れの伊井蓉峰、あの寫眞の包みを見た時、何とも云へぬ哀れを覺え候。御身の様な勝氣な陽氣な女も、矢張り苦海の女郎なり。小店の女が、淺草邊の小芝居のヘボ役者に何して、その手紙を肌身離さず持つて居るのと、心根に何の異る所あらんや。

女郎の岡惚れ位、果敢いものはなく、哀れなものはなく、切ないものはあるまじ。御身にも見ぬ戀の一幕があると知つて、何となく哀れを感じたり。肉體は弄ぶに任せても、因はれざる心こそ貴けれ。病氣になつては駄目、自重自愛くれ〳〵も祈り上候。

お清どん、お友どん、皆々へ宜しく、今度は何か美味いものを持て參るべく候。

「みゝずのたはごと」届いたか。田舍の事を書いてある本だ。何人の頭にも力強く響くことを、彼の作者一流の筆で書いてある。何時見ても好い本だ。三年後、五年後に讀ても、心を動かすべき本だ。大切にして、折々出してお讀みなさい、酒よりは美味い本だ。

お前に讀書癖があると云ふ一事は、何の位お前を懷しむ理由になつて居るか判らない。世間の女郎と云ふものは、無學で投げ遣りて、お客の財布を窺ふ位のものだが、お前にはそれが無い。女郎屋と云ふ浮華で、陽氣で、淫蕩で、それて居て陰慘で、沈欝で、病院みたいな所

のある、何とも云へぬこんがらがつた空氣の中に暮しながら、お前は何時も自分と云ふものを崩さず。忙しい間にも本の一つも讀まうとする、其の心根は得難い珍重すべきものてある。お前はさう自覺して、當分、本を讀むことを忘れてはならない。

新聞も努めてお讀みなさい。其の日〳〵の續物ばかりてなく、讀て判る樣な所は殘らず讀む方が宜い。吉原の中に居ては、世間話の種になる位のものだけれど、これから世帶ても持つて、西片町の令夫人にてもなつて御覽、新聞學問も大變お役に立つから。

「みゝずのたはごと」を、お前の樣な女が愛讀すると知つたら、其の著者も定めて滿足だらうと思ふ。しみじみと讀て御覽、知らぬ間に、涙のこぼれる所があるから……。

今度は、別の小説でも送らう。

夫婦になると云ふ約束だけは、當分しない方が宜いと思ふ。お前も云つた通り、一寸先は闇の世の中、一年後の秋までに、二人ともピン〳〵し居るか何うか、考へて見れば少々心細い。それにお互の心が、何う變るまいとも限らぬ。起請誓紙には空事が多いとか。

Yさんがいろ〳〵盡力してくれるけれど、思ふ樣に行かない。お前の方も同じだらうと思ふ。一年後の事だから、今から考へて置いても、決して早過ぎはしないけれど、いざとなればお互に考へざるを得ぬ。お前の方でも一生を委ねるに就ては、其の男に就ての希望もあらう。私の方でも、たゞの素人と違つた女を妻とするに就ては、いろ〳〵考

へねばならぬし、世間並の故障もある。先づこの話は當分おヂャンにして、前の樣に唯の馴染として、逢はうぢやないか。その方が、お互に面倒な小ゼリ合がなくて、氣樂で宜い。

それは別として、一度お前を連れて、お前が見たいと云ふ帝劇を見せてやりたい。お前一人を連れ出すためには、私の一ケ月の給料を棒に振らねばならぬと聞いて、實は悄氣返つて居る。そんな事は矢張り木塲のお大盡に限る。何事も金がもの云ふ世の中だ。私なんかは、其所になると、實に腑甲斐ない。

お前が素人になるの日、私は何うなつて居るだらう。そんな事を思ふと、最う餘り逢はぬ方が宜い樣な氣持もする。病氣は最う快いのか。左樣なら。

一、吉村健吉氏が天民に提供した日記、手紙は、未だ此の他に十餘通あるが、深刻なもの、露骨なもの、他愛の無いもの、餘りに私事に渉つたものは、總てこれを採用しなかつた。採用しなければならぬものも、惜いかな、其の筋の忌諱を畏れて捨てた。

二、二人は終に夫婦にならなんだ。花里は一年後を待たず、この四月十五日、深川木場の番頭さんに落籍されて、本所の××町に化粧品屋を開業した。吉村健吉氏よりも、西片町の先生は非常に失望して、××樓へ來ては、自暴酒ばかり飲んで居るさうな。

三、吉村健吉氏は、香水を買ふ樣な顏をして、花里の新店に行つて見たと云ふ。其の時、花里は大きな廂髪に結つて、襟の附いた縞

物の綿入に、大島飛白の羽織を着て居た。香水は男の方ならばと云つて、舶來の上等のを渡す時、ソッと手を握りしめた。

四、それから後は、未だ一度も逢はず、勿論文通などした事はない。別に何んとも思つて居ないけれど、世間が斯う何んだか俄に淋しくなつた樣で、居ても起つても居られないと云つて、吉村氏は冷たく笑つた。その笑つた顏には、ほんとに淋しさが漂つて居た。

五、以上の文字だけでは、花里といふ花魁の心持が、未だ十分に會得されないけれど、さうした男に關り合つた男——吉村健吉氏——の氣持だけは、朧ろ氣ながら讀むことが出來る。吉村健吉氏もこれを動機として、妻帶の用意でもしたら宜からうと思ふ。

I.0

紫の風呂敷包

「上」其の夜の思ひ出

五月十三日は雨に暮れて、柳の青葉に初夏の風薫ると云ふ昨日今日も、何となく秋の初らしい冷たさを覺える一夜、私は同じ社の小說家T氏を誘つて、曾て國木田獨歩が「號外」の題材にしたと云ふ、銀座二丁目の居酒屋「加六」に入つた。

八疊敷位の板の室に、大きな卓を二つ置いて、堅くて小い腰掛を七八個列べてあるばかり。十燭光の電燈は陰氣に暗いけれど、此處で飲む「菊正宗」には、攝州灘の匂が強いとあつて、左の方でも豪を以て聞える人々は、大概こゝに入つて飲む。法學博士のW氏、洋畫家のK氏、新聞記者の某々々、會社、銀行の某々々と云へば、加六でも定連の雄

なる者に數へられて、一種の羽振を利かして居る。

倦怠の幾日かを過した私は、全く酒でも飲んで、强烈な刺戟を受けねば、今日此の頃が遣り切れない樣な氣持がして居た。其の日も社の倶樂部で、終日玉を突いて暮したが、百、百五十の人と突いても負ければ、六十、七十の人と突いても敗ける。其の玉突さへも、單純な勝負だけでは興が乘らぬとて、莨を賭けたり鰻飯を賭けたりしたが、一度勝つては二度負け、二度勝つては、三度負けると云ふ風で、終には大きな聲で怒鳴りたい樣に燥つて來る。こんな時には、仕かけた仕事の事なんか忘れて了つて、酒を飲むに限ると思つて、加六の硝子戸を開けた。

加六には、既に三人ばかりの先客が居た。私等は卓の一隅に腰掛け

て、二人で六本を豫定の分量として、そら豆の茹たのや、蕗の辛煮を肴にして、チビリチビリと飲み初めたが、何うしても酔ふことが出來ぬ。頭が重いと云つて居た小説家T氏は、それでも氣持好さ相に酔つて、今、書いて居る小説が翻譯物であることや、作中の人物の性格などに就いて、愉快さうに語り出した。一所に酒を飲んで居ながら、相手の次第に酔つて來るのが、如何にも面白さうに見えて、それが羨ましい様な腹立しい様な氣分で眺められるのは、一所に飲んで居る者の不幸である。私も酔ひたい、T氏の様に酔つて、低唱微吟の心持になりたいと思つて、努めて杯を手にしたけれど、何う云ふものか、酒精分のみが強く鼻についてい、例の様に輕い頓興な氣分になれない。

讀まぬばならぬ新しい書籍は、十餘冊も書架に列べてあるし、書か

ねばならぬ原稿は、限りなく私を攻め立るのに、何うしてもしんみりとした、考察的の心持になる事が出來ない。そんな時には、大に酒でも飲んで、高興を盡して見るか、二三日旅行でもして來れば、心持が變つて好いものだが、私にはそんな金もなく、そんな時間も無い。斯うして知り合つた友人と一所に、加六の様な所で酒でも飲んで、僅に生活の平凡を打破ると云ふ事が、私等に相應しい心機轉換法である。願くは酒の酔に依つて、總ての物を忘却し去るの境地に踏み込て見たい。妻も、子も、家も、社も、仕事も、現在も、未來も、空々たり寂々たりの三昧に入つて、唯、この生の歡樂を心ゆくまで味つて見たい。私は斯うした心持で、其の夜も加六の硝子戸を開けたものを、先に酔ふべかりし私が酔損ねて、T氏の心憎い酔心地を見せ付けられては、

益〻悄氣返る一方である。

「今日は君、何うも醉はん樣てすね」

「何うしても醉へない、自分でも不思議に思つて居るのてす、酒は惡くないのに……」

「そんな時がありますよ、醉ふも醉はぬも酒次第よりは、其の時々の心持ですなア」

「全く今日は、酒を飲むべき日てない——」

同じ位に飲める人が、一所に飲て居る時、先を越されて醉はれて了うと、相手の方は醉ふべきチャンスを失つて、何時も第二者の保護役になるのが例である。「今日は俺が醉ふから、介抱係は君に賴む。今度は俺が介抱役て、十二分に君の醉態を發揮させる」、こんな相談なんか

せずとも、時と場合に依つて、T氏が私であり、私がT氏てある事は、決して珍しくない。然し其の夜の加六ては、相手の醉ふと否とは問題外にして、先づ自分から醉はうとして、努めて杯の數を重ねたけれど、私の心は依然として佗しく淋しかつた。

さすがのT氏も、氣の毒に思つたのか、そこ〳〵に勘定を濟ませて、雨の銀座通りに出た。新宿に歸るインバネスの人と、青山に歸る薄外套の人とは、尾張町の四辻に立つて、往來の電車を眺めて居たが、二人の足は自然に吸込まれる樣に、カフエー、ライオンの扉を明けた。十燭光の煤ぼけた加六から、電燈や瓦斯の光眩ゆいライオンに入ると、同じ東京の銀座てありながら、斯うも世界が違ふものかと驚かれる。私は默つてT氏の背後に從いて、一隅の丸い卓子に腰掛けながら、先

づ捲莨の煙を吹いた。

階下のバーは一時、寺院に似た靜寂に襲はれて居たが、押へ付けられる樣に頭重い雨の一夜を、異つた國々の五色の酒で醫さうとするのか。××公使館の通譯官、法科大學生の某々、××新聞の劇評家、外交記者、××會社の支配人と云つた風の人々は、何處からともなく次第に落合つた。大きなビールのコップとコップとが、カチリと景氣好く觸れ合ふ音が聞え出すと、室内には莨の煙が渦卷き、酒の香が漲り渡つて、四邊の空氣までが何となく陽氣に、華やかに搖めいて來た。日本酒に好い加六の四角な卓子には、人の心を地の底深く引込む樣な、一種の重くろしい沈鬱な氣があつたけれど、五色の酒に好いライオンのバーには、人の心を陽氣に浮き立せる樣な、一種の輕い華やかな調

子が流れて居た。

私はこゝで、赤いチエリー、ブランデーを飲み、青いペパーミントを飲み、琥珀色したビールを飲んだけれど、遂に醉ふことが出來ない雨の夜である。ヂッと斯うして丸い卓子に倚つて、人々が面白さうに飲んで醉つて、騷ぎ廻つて居るのを眺めるのみである。折柄の話題は加州問題、支那事件、飛行家の死、小學生の水死から、新橋赤坂の品評、新女優の是非などを、口角泡を飛して語るがあれば、でかんしよ節、義太夫、追分節、奈良丸くづしと、バーを擧げて歡樂の夢を追うて居るのに、私は今宵に限つて、其のサークルの一員たること能はず、斯うした空氣の中に圍はれながら獨り味氣ない氣持になつて、淋しい思ひ出に耽るのみである。醉ふまいとしても醉ふ事のある以上、醉ひ

たいと思つても、酔ひ得ぬ夜の佗しい氣持は、酒の味を解する人にのみ、初めて會得し合點して貰へやう。いろ〳〵の酒の誘惑を以てしても、酔ひ得ない時折のある事を、私は私自身の其の夜に經驗して、「酔ひ得ぬ強さ」を誇るよりも、「酔ひ得ぬ淋しさ」に泣きたい樣な氣持になつた。

こんな時に、人は遠い昔の思ひ出に捕虜となつて、現在の佗しさを過去の夢に追はうとするものである。酔はんとして酔ひ得ぬ哀れな男は、相應に酔つて居るらしい小説家のT氏と、通譯官のA氏とを引張つて、無理に三階の小さな部屋に入つた。そして、

「私は、何うしても酔へない。酔はうとしても酔ふことが出來ないのは、實に哀れなものですね。忘れて居た昔の事が、走馬燈の樣にグ

ル〳〵浮んで出て、起つても居ても堪らない樣な氣持になつた。何うしたら宜いのか、自分で自分の心持が判らない」

と云つた。三人の前には、白いエプロン掛けた女給仕が、紅茶を注いで行つた。

「別れた女の面影を、思ひ出の其處此處に尋ねて、此の所、人生不如意の一幕と云ふ段取ですかね。何うですA君、酒に酔ひ得ぬ哀れな男のために、其の昔話を聽いて遣るのも、何かの功德になりますぜ」

小説家が斯う云ふと、通譯官も、

「僕等も最う酔ざめの水が欲しい頃だ。M君の小説的追懷談を聽いた上で、更に大に杯を擧げ樣ぢやありませんか」

と云つた。私は紅茶を一氣に飲み乾して、

「何うか聞いて下さい、そして別に讀で貰はねばならぬ物も持つて居る。私はこれだけの事を兩君に打明けて了へば、屹度、愉快に飲めもし、醉へもするだらうと思ふ」

ライオンの夜はさんざめきに更けて、階下のバーも大分靜になつたらしい。銀座通りに降る雨は容易に歇まず、五月の中旬と云ふのに、何となく薄ら寒い。電車の音のみが、絶えては又續いて、三階まで強く響く。

醉はうとしても醉ひ得ない今夜の思ひ出は、十年前の明治三十七年、私が未だ大阪の××新聞社で、三十圓足らずの安月給を貰つて居た時

の夏である。輕い脚氣を病て、轉地療法をする事になつたが、遠方に旅行するにも、郷里の美作に歸るにも、先立つものは金とあつて　意の如くにならない。

新聞社の方は、二週間の豫定で暇を貰ひ、其の上、三十圓ばかり借金したが、さて何處へ行つたものかと、私はいろ〳〵思ひ煩つた。當時、私の尊敬する新體詩人のS氏は、大阪で發行して居た文藝雜誌×が廢刊になつて後、居を京都岡崎の里に移して、簡易な生活を送つて居たので、私は取敢ずS氏の許を訪ねた。其の頃、京都にはS氏を中心として、若い文學者の群が居たし、H、K、T、Oなど云ふ、友人の來往も頻繁だつたので、私は京都と云ふ土地が、脚氣の療養に適して居るか何うか、そんな事には頓着せず、喜んで上京した。

京都と云へば、私にとつては忘れ難い少年の記憶がある。明治二十八年の春から夏にかけて、第何回かの内國勸業博覽會が開けた時、私は岡山の藥種商××の丁稚奉公を廢めて、遠緣に當る×氏の許に寄食した。これが私の京都に於ける最初のペーヂで、十八歳から二十三歳になるまで、私は東京、大阪、美作と轉々したけれども、何時も休息の場所として、京都を懷しみ、京都で暮す機會が多かつた。食客をしたり、寫眞屋の丁稚見たいな事をしたり、牛乳配達をしたり、會社の臨時雇などを勤めた。謂はゞ苦勞の多かつた京都でありながら、私は常に京都を懷しむて居た。二十三歳にして、大阪で初めて新聞記者に爲つてからも、京都と云へば戀人の樣に、常に私の心を波立たせて居た。脚氣療養を名として、取るものも取敢ず京都に上つた時、私はこ

ゝて數日を暮し得る幸福と愉快とに、人知れず微笑まずには居られなんだ。

京都に於ける其の十日間は、實にのん氣な樂しい月日であつた。生活の渦卷きから脫れ出て、夜は岡崎に二階借して居るS氏の室に、蚊帳を同じうして眠り、晝は寺町に箏曲の樂堂を有するK氏の許で暮して、大阪に於ける探訪記者生活の苦勞などは、遠い昔の夢でも見る氣して眺めて居た。其の頃の京都は、電車も今の樣に通つて居らず、都の大路小路から隅々の何處へ行つても、未だ舊都の名殘が濃く匂つて居た。室町、烏丸の軒々に見る昔風の商家、祇園、先斗町に見る色香の漾ひ、御苑の周圍に見る維新時代の色彩、さては東山の翠なる、鴨川の白き、仰げば高い比叡の雲、岡崎、吉田に漲る野趣など、少年の生

活を託した第二の故郷で、私は其の夏の幾日を愉悦の情を以て過した。初めて戀を知つた所、無二の親友と死別した所、學問に憧憬れた所、空想を恣にした所としても、それからそれへの思ひ出盡さぬ京都の夏で、二十七歳の探訪記者は、貧しいけれども清い幾日かを過した。

S氏から泰西文藝の梗概を聞いたり、K氏の妙なる琴の音に、戀を戀する氣持になつたり、新京極で食つたり、疎水に泳いだり、若王子畔に涼んだりして、身も世も忘れて、十日餘を現の間に過した。

私が今話さうとするのは、其の十日間に逢つた一人の女性である。何處の何と云ふ人か、姓も知らねば名も知らず、生きて居るのか、死んで居るのか、それさへ今は判らない一人の女に對して、私は忘れ得ぬ思ひ出を有つて居る。今から十年前と云へば、短い樣でも隨分遠い

昔である。互に相許した戀仲でも、西と東と遠く隔つて居れば、其の日〳〵の眼前に遮る事件のために、忘れ果てゝ了ふが世の常であるに、私は何う云ふものか、緣も因もない其の女を、十年後の今日に至るも、忘れることが出來ない。今は嫁して人妻になつて居るか、或は老孃の孤獨を守つて居るか、アメリカ邊に學んで居るか、或は死して既に此の世の人でないか、夫さへ杳として知るに由ない女の上を思ふ毎に、私は何とも云へぬ果敢さを覺える。骨肉、戀愛、交友、同業など云ふ因緣があるでなく、唯、路傍相關せざる人でありながら、不圖した遭逢に絶ち難い感銘を繫がれて、隨時隨所に、思ひ出の姿を懷しみ、忘れ得ぬ面影に憧憬れると云ふ樣な事は、お互の日常にも稀に經驗する事である。何人であるやら相語り相知るに至らず、刹那の遭逢は永遠

の別離となつて、個々別々の道を辿りながら、同じ墓場の土に化し行くのかと思ふと、この生の佗しさ淋しさを、今更の様に感ぜずには居られぬ。

其の女性と云ふのは、齢の頃二十七八、面長の脊の高い、痩せて色の黒い女であつた。両鬢をギユッと詰めた廂髪に結つて、小い井の字飛白の浴衣に、黒繻子らしい帯を締めて居ることもあれば、茶色がゝつた帯をして、雪駄を穿いて居ることもあつた。何時も夕暮の六時頃から七時までの間に、寺町通を上つて丸太町を西へ曲り、府立圖書館前を御苑の中に入つて行くのを、四五日の間毎日續いて見受けた。齢が齢なり、容貌も十人並劣つた方であるし、男の心を引くに足る様な何ものも持つて居ないのに、私は妙に其の女性が氣になつた。右の手

には何時も鐵色の洋傘を携へ、左の手には紫色モスリンか何かの風呂敷包を抱へて、少し前屈みの、女にしては外輪な足どりで、御苑の中を西へ堺町御門から、北へ北へと消えて了ふ姿を、私は四五日の間、同じ時刻に同じ場所で見た。若し女の方でも私の様な男と、毎日同じ場所で同じ時刻に逢ふと云ふ事に氣付いたなら、終には目禮の一つもして別れる様になつたかも知れないが、女は終に氣が付かなかつたらしい。何か斯う一方をのみ見詰めて、深い考へ事でもしながら、傍目もふらずに歩くと云ふ風があつた。

此の氏も素性も判らない女を、私は何うして今日まで忘れずに居たのか、自分でも不思議で堪らない。斯うして女の上を思ひ起して見ると、顔も姿も朧ろ氣には判るけれど、最も強い印象は、其の「紫の風

呂敷包」である。菊版の書籍を五六冊重ねて、それを包んだらしい大さのある彼の包の中に、何んな物が入つて居たのか、女一代の幸不幸の運命は、彼の包の中にあつたに違ひ無い。私は當時この事を、新體詩人のS氏にも話し、箏曲家のK氏にも語つたが、二人は、「同志社女學校の女教師か、平安女學院の先生か、何れにしても文學や音樂の趣味は知らぬ、理科か數學の先生だらう」と云つて笑つて居た。固より此の女性の過ぎ來し方や行末に就いて、二人は何の興味も有たない傍觀者で、「そんな類の女は、京都でも上の方には澤山居るよ」と云つた、其の言葉にも冷たさがあつた。

其の女が若し、私の知つて居る女に似て居るとか、何處かで逢つた事のある女と云ふのなら、別に不思議でも何でも無いが、私には其の

女の容貌や態度に依つて、他の女を思ひ出すだけの似寄つた知合がなかつた。全く初めて逢つた女——御苑の夏の夕暮に、袖擦り合つたに過ぎぬ女——でありながら、私は不思議に其の女の上を忘れることが出來ない。少年の六年間に、其の折々の生を託した京都の自然と人事とには、より淺からぬ思ひ出もあれば、より絶ち難い因緣も有るのに、私は何ういふものか、十年後の今日に至るまで、何の緣も因もない其の女の上を忘れることが出來ない。

こんな事は、大抵の人が其の一生の間に、一度か二度は必ず經驗する事だと思ふ。——

通譯官のA氏も、小說家のT氏も、私の此の長い物語を、默つて聞いて居たが、

「小説の様な話ですね、小説でも謎に似た發端だと思ふ。紫の風呂敷包！獨り其の女のみてなく、人間の運命と云ふものは、さうした風呂敷の中に、人知れず包まれて居るのかも知れませんね」

と云つて、小説家は金口の捲莨を吹いた。

「醉はうとしても醉へない雨の夜に、君が何處の何人とも知れない女の上を、さうして夢の様に思ひ起して居ると同じ様に。其の女も亦何處かの二階で、十年前の御苑の夕暮に逢つた男の事を、古い日記でも見る様に、思ひ起して居るかも知れない」

と云つて、通譯官は葉卷に火を點けた。

これだけの思ひ出、これだけの感慨ならば、何でも無い斷片に過ぎぬけれど、私は此の女を思ふに適い一女性を、それから數年の後、京

都の××女學校の女教師に見た。紫の風呂敷包を以つた女とは、似ても似つかぬ別の人ではあるが、十年後の今日、斯うして思ひ起して見ると、「紫の風呂敷包」と其の「女教師」とが、同じ人の様に見えて仕方がない。同じ人の様に結ばれて、彼れが此れか、此れが彼れかの差別さへ、確と判らなくなつて了ふのが例である。

私は斯う云つて、其の女教師に就いて書いた一篇を、兩氏の前で朗讀した。手紙風に書いてはあるが、別に其の女教師に送つた譯ではなく、何かの材料にしようとて、五年前から本箱の抽斗に、人知れず藏つて置いたものである。

雨はいよ〳〵降りしきる。卓上のコーヒーは、何時の間にか水の様に冷えて居た。

私は、其の一篇を讀み初めた。

「中」失戀に泣く老嬢（オールド、ミス）

齢は三十三だと云ふけれど、二十七か八にしか見えない安村國子さん。張り切れる様な筋肉を有つて居ながら、人に嫁して子を生まうとはせず。今出川の寺院の一室に、尼僧に似た孤獨の月日を送つて、淋しさうな顔もせぬ安村先生。私は今、貴嬢に宛て此の長い手紙を書く際し、萬感胸に溢れる様な、何とも云へぬ一種の哀愁を覺えます。

京都××女學校の先生たる貴嬢を呼ぶに、「國子さん」と云つては不相應だけれど、暫く「國子さん」と呼ぶを許して頂きたい。私にはそれが、最も容易て、最も心易くて宜い名である。

國子さん、思へば貴嬢と逢つたのは、ツイ三四日前だと思つて居たに、秋は秋ても最う去年の紅葉ではない。寺町のK氏の樂堂て、S氏の新作を初めて彈奏した夜、私は彼の夜の光景を忘れる事が出來ない。其の席上には、美しく着飾つたK氏の門下生が、花ならば盛を競ふ櫻の様にズラリと列んだ艶麗さ。文藝の道に造詣深い詩人、作家の群に隣しては、丸髷、廂髪の夫人達が、燭臺の雅びた光に横顔を照されながら、衣摺れの音も輕う坐つて居た。庭に喞く蟲の音絶え〳〵に、衣簪の香室内に漂ひ渡つた頃、K氏は延暦時代に見る衣冠の姿で、一禮して琴の前に坐つた。彈じ出す新曲の音は冴えて、妙なる調に人我の境を忘れた時、女達の間には人知れず、袖や袂て涙を拭ふのを見受けました。

其の時、國子さんは、私の隣に坐つて、一心にK氏の調を聽いて居たが、曲半にして、或は緩く或は急に、或は咽ぶが如く或は泣く樣な、間の手に入つた時、あゝ其の時であつた。貴嬢はハンカチーフを顏に掩うて、最う堪へられないと云つた風に、ヨゝとばかり啜啼いた。三十前後の肥り肉な、丸顏の血色の好い、何處となく取澄した婦人との み見て居た方が、俄に咽び泣くのを見て、私は一方ならず驚いた。

「何處かお惡いのぢや無いですか」

と低聲で、貴嬢の顏を覗き込んだ時、貴嬢はちよいとハンカチーフを放して、私をチラと見て、

「えゝ、胸が痛くなりまして……」

と云つたのを、今でもお忘れではないと思ふ。國子さん、貴嬢は其の

時、他の人に氣取られぬ樣に座を立つて、表の玄關の方へ立て行つた。私も亦人知れず玄關に出て、貴嬢の後を追ふ樣にして、樂堂の裏庭に入り、折柄の月光を浴びながら、初對面の貴嬢と種々のお話をした事を、私は昨日の樣に思つて居ます。

知らぬ男と女とが、さうして逢ひ、さうして物語をするには、實に相應しい秋の月夜であつた。樂堂では一曲終つたと見えて、拍手の響に次いで、主人のK氏がカラ〳〵と笑ふ太い聲が、手に取る樣に聞えた。其の時は最う、貴嬢が京都××女學校の理科教師であり、私が大阪××新聞の社會記者である事を、お互に了解して居たので、私も無遠慮にいろ〳〵の事を話せば、貴嬢も過ぎ來し方の雨や風を、包まずに話された。そして、

「妾、先刻泣いて居たてせう、胸が痛いと云つて！。Kさんの琴の音、秋の新曲の哀れに誘はれて、ツイ泣かされて了つたのです。宜い齢をしてお恥しい……」

と云はれた時、私は最う貴嬢の總體を知り盡した様な氣持がした。僅に二三十分の間、人目を忍ぶ様な裏庭で、お話をしたに過ぎぬけれど、私は彼の夜の様を忘れることが出來ない。あれから後、今日までの間、國子さんの姿と聲は、幻の様に私の眼前に浮んで出る。幾度か書かうとして書き得なかつた此の手紙を、遂に思ひ切つて書く様になつたのも、其の夜の光景を偲ばうとする切無い思に外ならぬのです。

斯う云へば、如何にも國子さんに戀して居る男の口吻らしいけれど、私は貴嬢と云ふ異性に對して、戀愛若しくば戀愛に似た感情を、毫も

有つて居ない事を告白して置きます。初めてお目に掛つた時が時なり、所が所なり、場合が場合であつた上に、語りもし聞きもした其の事が、餘りに小説的の色彩に富んで居た爲め、それて貴嬢を忘れる事が出來ないのかも知れない。私は彼の夜K氏の宅に泊つて、K氏から寢物語に、「安村國子」と云ふ一女性の過ぎ來し方を聞いて、非常に心を動かされた。裏庭の月下て聞いた貴嬢の話と、K氏の寢物語とを一所にして、私は私自身の「安村國子」と云ふ小説を作つて、それを自分一人て眺めて暮さねばならぬと思つた時、唯、私の心には淋しさ、味氣なさに似た氣持が充ちて居た。

私はこゝて、私の知つた「安村國子」、貴嬢の前に展開げて見たい。初めて逢つた其の夜から一年後の今日まて、遂に相逢ふ機會も無く、

心を籠めた手紙の往復もして居ないけれど、私は國子さんの總體を知つて居る。廣島縣の農家に生れて、高等女子師範學校に學び、今は京都××女學校の先生であると云ふ、其の無事平穏な過ぎ來し月日の中にも、貴孃の半生を彩つたものは、遂げざりし戀の哀思であつたに違ひない。女の肉體に流れて居る血汐を矯めて、嚴しい道德と冷たい知識とで、これを養ひ育てるより他に、教育の大道を知らぬ氣に見える高等女學校で、女の道を教へられた女にしては、貴孃は餘りに感情的である。女の心の底に巣ふ情性を破つてまでも、賢妻たれ良母たれと教へる高等女學校に先生としては、貴孃は餘りに戯曲的の人である。數學の先生を勤めて居ながら、貴孃は小説を讀て悲しみ、音樂を聽いて泣き、芝居を看て咽ぶ類の女である。

私は今日までに、多くの老孃（オールド、ミス）を見た。多くの獨身婦人を見た。殊に女學校の教師、舍監と云ふ類の女に、尠からぬ老孃（オールド、ミス）の群が居る事を知つて居る。それ等の多くは齡三十を過ぎても、娶らず嫁がぬ理由として、樣々な事を云つて居る。男女同權を唱へ、婦人の獨立自營を說き、甚だしきに至つては、結婚を目して異性に對する一種の屈從となし、妻となり子を生むことを以て、人としての女の辿るべき唯一の道て無いとまで、極論して居る輩を見る。國子さんも亦、時と場合に依つては、色香の衰頽を見る中年でありながら、孤獨の生活を送つて居る申譯の理由として、

「家庭を持つて、種々の面倒を見るよりは、斯うして獨身で居る方が、何の位氣樂だか知れません。男なんか、厭ですねえ……」

と云ふかも知れないが、それは嘘である、己れを欺き人を欺く虚言である。女學校の教師を勤めて居れば、自分にも衰へ行く老孃の果敢さを思ふ暇がなく、世間も亦別に怪しまないけれども、私は老孃が大嫌である。嫁して人の妻となり、子を生み子を育て、其の一生を終ると云ふ事と、女學校の先生になつて、女子教育に一身を捧げて、孤獨の生涯を送ると云ふ事の、衡の輕重を知らない様な女が、世に謂ふ老孃の群である。

國子さん、私は貴孃がそんな世間體の好い理由の爲めに、三十三歳の孤獨を送つて居る人とは思ひません。貴孃の様な色香の衰へ切らぬ老孃には、如何に修養があり學殖があつても、一種の老孃氣質と云ふものが出來て、それが日常の事毎に顯れるものである。男に對する冷

たい投げ遣りな態度、兎もすれば男を凌がうとする出過ぎた努力、公平無私を衒ふ物事の理解など、思つただけでも厭である。殊に若い女に對する老孃は、嫉妬とも何とも云ひ様のない、一種の偏執れた態度をするもので、凡て自分の心持を標準にして、萬事を極め付けて行かふとする様が、男の眼にも心憎く見える事が多い。私は常にこれ等の老たる孤獨の女を見る毎に、女としての榮ある天分を捨て、生れた儘の幸福に浴し得ない哀れな人として、其の影の淡く薄いのを氣の毒に思つて居る。嫁すべき時を失つて、孤獨そのものに、種々の理窟を附けて、僅に自ら慰めて居る女ほど、世に哀れなるはない。

多くの老孃は異性に對する時、常に一種の强味を有つて、男性化した其の言動と、肉感的な厭らしい調子とで以て、相手を屈伏し様とする

ものですが、貴嬢にはそれが無い。三十三歳の長きを尼僧に似た月日の下に送りながら、貴嬢は矢張り女である。弱々しい、涙脆い、感受性の強い、多恨の一女性である。寺院の一室に起臥して、冷たい講堂で、何の趣もない算數を教へて居ながら、貴嬢の肉體に流れる血潮は、常に或る者の爲めに燃えて居た。世の常の老嬢に見ない優しさを、初めて逢つた秋の月下に見出した時、私は謂ひ知れず嬉しかつた。

貴嬢がさうして、厭な老嬢氣質にも囚はれず、涙に霑ふ胸を抱いて、穏かな京都の月日を送つて居られるのは、戀の思ひ出が有る爲めだと思ふ。遂げざりし戀の思ひ出、悲しく痛ましき戀の思ひ出は、枯れ勝な貴嬢の老嬢生活に、何れほど慰藉ある色彩となつたか知れない。貴嬢もさう思ひさう信じて、此の日頃を過して居られることだと思ふ。

國子さん、貴嬢の老嬢生活の裏面に、悲しい戀の思ひ出がある事は、初めて逢つた其の月夜に、何も彼も承知しました。琴の音を聽いて咽び、月明の下に歔欷いた老嬢の涙を見て、私は初めて女の心の眞實を知つた樣な氣がした。貴嬢と云ふ一人の女に、さうまで思ひ慕はれて居る男の幸福を思つて、私も思はず落涙した事を、よもお忘れてはありますまい。

貴嬢は其の男の何人であるかを、何うしても語らなかつたけれど、私には一人の心當りがある。果して其の男が、國子さんと相許し相契りながら、世路の風波に妨げられて、遂げざりし戀の悶えを抱いて、肺に死んだ村井芳次郎であつたか何うか。死者言はず、貴嬢も語らず、

それと明ら様に言ふを憚れども、私は其の男が、私に唯一人の親友であつた、村井芳次郎の様に思へて仕方がない。たとへ貴嬢の思ひ出に浮ぶ人は村井でなく、村井の死ぬるまで戀慕つた女は貴嬢て無かつたにしても、私にとつては涙なくして見ることの出來ない戀物語てある。幽明境を隔つる村井と國子さんとを一所にして、其處に痛烈な戀の一齣を眺める時、私は初めて、戀に「永遠の力」がある事を知ります。

國子さん、相思五年の春秋は、村井の上にも長閑であつた。或る年の櫻花も最う散つて、若葉青葉の眺め好い嵐山に、村井と共に一夜を語り明した時、私は初めて一人の若い友人が、切ない戀に悶えて居る事を知つた、其の頃から酒を飲むことを覺えて居た私は、餘り嗜まぬ村井に勸めて、無理に杯の數を重ねさした。美しい酌する女が、其の

席に侍つて居ると云ふてなく、時々其の家の幼い女中が、銚子のお代りを持つて出るに過ぎなかつたが、それでも二人は相應に量を過した。心に何の隔もない親しい友達が二人、都離れた小さな宿屋の二階て、夜更けるまて人生を論じ、戀を語つた其の時の光景を、私は今も尙明瞭に覺えて居る。私は色の黑い丸々と肥滿した方だが、村井は白い瘦せた背の高い男で、酒を飲むと白い顏が一面に上氣して紅くなり、眼に何とも云へぬ人を惹付ける力を持つて來る。華やかな浮いた戀をする男ではないが、沈んだ煩悶の多い戀をする男としては、誂へ向に出來て居る方てあつた。

其の夜、村井は相手の女に就いても、又自分が戀する樣になつた始終に就いても、何も彼も包み隱さず打ち明けて話した。其の女は今、

東京の高等女學校で學んで居るが、卒業後は四五年の間、地方の女學校に先生とならねばならぬ約束がある。其の女からは、何うして女子教育家にならうなどゝ志望たか、自分の過ぎ去つた愚さに泣いて居る、と云ふ樣な手紙が、月に三四回は來たさうてある。弱い女の身に生れて居なから、學問の桎梏に縛られて、戀の甘酒酔み交すことさへ儘ならぬ運命を、歎き悲しむ樣な文句を列ねた手紙が、月に三四度は來たさうである。其の女は備後尾の道の生れて、村井は備中高梁の生れであることや、岡山から大阪に出る汽車中て、初めて其の女に逢つた事や、その偶然の遭逢か淺からぬ緣となつて、互に取止めもない文通をして居る内、遂に絶へ難い熱烈な戀に落ちた事や、互に五年の後を堅く約して、家を持つべき用意をして居た事まて、村井は落着いた風情

のある口調て、それからそれへと物語つた。小説ても讀む樣な、空想的の句に充ちた其の話を聞きながら、私は戀する男女の希望多い前途を祝福して、思はず杯の數を過した。美ましい樣な、頼りない樣な、夢見る樣な戀物語を聞きながら、私は戀する人達の氣分を、しみ〴〵と味ふことが出來ました。

村井の樣な多感性の男と、相思の戀に落ちた女の上を思つて、私は何となく懐しかつた。

「友達と云ふ友達は澤山あるけれど、僕の此の心持を話して、同情してくれる者は、君の他にはない」

と云ひながら、村井は其の女の寫眞を見せることも、其の女の手紙を示すことも、斷じて許さなかつた。寫眞を出して見せたり、手紙を讀

て聞かせたりするのは、世に有り觸れた浮華の戀である。二人の思は唯二人の胸深く秘めて、此の戀遂げた春の日に、晴れて笑つて物語らうとのみ、村井は淋し氣に微笑むだ。

國子さん、村井は其の時分から、左の肺を病むて居たのです。家の都合で文科大學を二年で退き、其の頃は京都の黒谷で、淋しいが氣樂な月日を送つて居た。翻譯物をしたり、評論を書いたりして、村井白夢と云ふ名は、若い人々の間にも、相應に渴仰されて居た。文藝講演會に出て、フランチエスカの戀を論じたり、叡山の頂上に登つて、默禱の幾日を過したりして、思索的の春秋を送つて居る間にも、村井の生活を彩つたものは、唯相思の戀人であつた。其の肺に巣ふた毒蟲の爲めに、肉體の衰へを感ずる樣になつてからも、村井の心は、唯、戀

に生きて、遣る瀬ない現在から、樂しい未來に繋がれて居ました。

それから後の事は、實に語るも涙の種である。大學醫院で二期の肺結核と診斷されてから、村井は須磨に轉地したり、琵琶湖畔に室借したりして、專ら療養に手を盡したけれど、遂に大學醫院の隔離室に入つて、其處で起臥せねばならぬ秋の日が來た。咳啖に續くに咯血と云ふ惡性で、見る影もなく衰へた或る日の夕暮れ、親しい友人三五名は、村井の枕頭に集つて、黯然として聲を呑んだ。其の時、村井は仰向けに寢たまゝ、友達の手を順次に握りしめて、涙をホロ〳〵零しながら、ヂッと天井を見詰めて、長い力ない吐息をした。親友村井芳次郎の若い生命は、今まさに終焉の床に横はつて居るかと思ふと、私は堪へられなくなつて、眼を窓の方へ外らした。

やがて村井は、枕の下から端書位の大きさある一個の紙包を取出して、默つてこれを私の手に渡した。

「僕が死んだら、これを一所にね……」

と云つたかと思ふと、また力ない吐息をして、ハラ〳〵と落涙した。

病院の秋の夕は、何と云ふ寂しさであらう。窓外には風寒う吹いて、外科室に通ふ長い廊下を、音もなく往く看護婦の白服まで、何となく陰氣に冷たく見える。斯る夕、人は死の神に導かれて、靜に……靜に、遠い冥土の旅路に行くのか。國子さん、村井は其の夜九時三十分と云ふに、終に永久に還らぬ天國の人となつて了ひました。

村井の死後、私は其の机の抽斗や、本箱の中、行李の底を殘る隈なく搜したけれど、彼が生前戀慕つた女の姓名も住所も、遂に發見する

ことが出來なかつた。思ふに村井は、死期の近いたのを自覺して、戀人と往復した信書は勿論、戀人に關するものは、日記も紙片も、悉く破るか燒くかして、捨たのでは無いてせうか。村井が臨終の夕、「これを一所にね……」と云つた紙包の中には、戀人の寫眞と姓名とを入れてあるに違ひないと思つたけれど、私はそれを披き見ることを遠慮した。村井の戀は、村井の死と共に現世を去つた大なる謎であり、また大なる秘密として、其の儘に葬るべきものである。何處の如何なる女性と、如何なる戀に落ちて居たか、私はそれを知らなくても宜い。戀も悶えも、死は凡ての終局であると思つた時、私は友の形骸に對して、其の短く淋しかつた生涯に泣いた。

安村國子さん、貴孃の戀した男が、此の村井芳次郎であつたか、村

井の戀した女が、貴嬢であつたか、私は種々に思ひ惱んで居る。貴嬢の失はれたる戀と、村井の遂げざりし戀と、たとへ何の關る所無いにしても、私はこれを一所にして眺める時、今更の樣に人生の切ない哀調を感ずる。空しく死んだ薄倖の男と、徒に悶える孤獨の女と、悲痛の戀を同じうして、幽明境を隔て居ると云ふことは、眞に意味の深いフヰルムである。私は、村井の慕つた女が國子さんであり、貴嬢の戀した男が村井であることを事實として信じたい。事實としてこれを認める時、私は第三者としての滿足に、初めて微笑むことが出來ます。

私は最う、貴嬢の戀人が何人であるかを貴嬢に向つて聞かなくても宜い。色香の衰褪も遠からぬ三十三歳まで孤獨の月日を送つて居る仔細も、私には明瞭に讀むことが出來た。遂げざりし戀の怨を抱いて、

肺に死んだ村井芳次郎も、貴嬢がさうして何時までも、淋しい老嬢の生活を送つて居ると知つたなら、何んなに喜ぶことでせう。かりそめの遭逢は久遠の緣を結んで、死者の思や去らず、生者の惱や消えぬ所に、強く烈しい「戀する人の力」を見る。願くば、貴嬢の戀した男が村井であれ、村井の戀した女が貴嬢であれ。

私は今、この長い手紙を書きつゝ、K氏樂堂裏庭の秋、月光を浴びて立つた國子さんの姿を思ふ。世に見る老嬢は厭だけれど、弱い、涙脆い、女らしい、安村國子さんは好きである。其の全生涯を擧げて、童貞の淸さを守るも、或は嫁して人妻となるも、これを運命の神に委ねて、貴嬢は何ごとも思はずに、行ける所まで行くが宜い。

女の辿る道筋は、昔から一つである。——

「下」醉ひ得ぬ淋しさ

カフエー、ライオンの二階で、私が此の長い文章を讀み終るまで、雨は小歇みなく降り續いた。

通譯官のA氏も、小說家のT氏も、相應の醉心地で居ながら、私の長い話と長い朗讀に對しては。同情ある聽者であつた。醉はうとしても醉ひ得なかつた私は、これて何だか晴々しい氣持になつて、更に三杯のウヰスキーを命じた。服部の時計臺に十一時が鳴つて、最う醉つても好い初更になつた。

「紫の風呂敷包に對する淡い思ひ出から、老孃と云ふ女の一サークルを抽象し、更に一度逢つた限りの女に依つて、戀に死んだ亡友の

面影を偲んで、此の三者を一つにまとめた小說を讀まうとするのですね。發端もなく、中心もなく、大詰もない、夢の樣な話だけれど、M君と云ふ此の事件の話術者と朗讀家を、舞臺の一員として見物すると、其處に何とも云へぬ興味がある……」

小說家は斯う云つて、ウヰスキーを飲んだ。

「村井芳次郎と云ふ人の戀した相手は、其の國子とか云ふ女でなくて、今頃は誰かの細君になつて、子供を三四人生んで居る者かも知れない。安村國子とか云ふ人の忘れ得ない男は、其の死んだ村井ではなくて、今頃は美しい女房を持つて、脂下つて居る人物かも知れない。それを紫の風呂敷包に引付けて、空想的に眺め樣とするのが、M君の興味であつて、また一種の道樂である……」

通譯官も斯う云つて、ウヰスキーを飲んだ。

「斯うして話をしたり、また數年前に書いた舊稿を讀て見ると、私の思ひ出は先づ親友村井に出發して、それから一度逢うて談話をした事のある國子に及び、最後に何の緣もない紫の風呂敷包に到着するのが、當然の樣に思へるのに、何う云ふ譯か村井も國子も浮かばずに、紫の風呂敷包だけが、過ぎ去つて京都の中に色濃く浮んで見える」

私も斯う云つて、ウヰスキーを飲んだ。

紫の風呂敷包を抱へて、淋しさうな足どりで、御苑の夕暮を歩いた女は、其の後何うしたてあらう。斯うして何も彼も話した後、眼を閉ぢて、過ぎ去つた京都を思ひ起して居ると、何人よりも明瞭に、何者

よりも色濃く浮んで見えるのは、其の「紫の風呂敷包」である。戀に悶える安村國子とは、似ても似付かぬ別人でありながら、老孃の淋しい孤獨を行く其の人は、紫の風呂敷包を抱へた女らしく思へて仕方がない。御苑の夕暮に見た彼の影の薄い人にも、さうした戀物語があつたか何うか、――最う十年の月日が經つた。

私にとつては、「紫の風呂敷包」は、老孃の一表徵である。女學校や小學校の女教師、さては銀行會社の事務員、女工監督、女子判任官などの群に、齡老いた淋し味深い女の影を見る毎に、私は何時でも老孃の世に幸福薄さを思ふ。嫁して人妻になり、子を生み子を育てるのが、女の辿る唯一の道でありながら、運なればこそ娶らず嫁かず、獨り學び、獨り勤め、獨り食ふ月日の下に、老い行く姿を哀れに見る。

新しい女と云ふが出來て、思想の自由を叫び、生活の獨立を說き、行くべき道の新しきを拓かうとする曲り角に、赤色も鮮明な旗幟の飜るを見る世の中でも、これ等の群の落ち行く先は、唯「紫の風呂敷包」である。女の主張が是認せられ、女の自由が保證せられ、女の獨立が確實になつた時、世に老嬢の群を見ることは、より多くなるに違ひない。——最う十年の後である。

初めてウヰスキーに醉心地の私は、T氏とS氏とを捉へて、種々の事を饒舌つた。

「新しい女の出現が、やがて老嬢の增加を意味することは、疑ふ餘地の無い事實だと思ふ。女の自覺も結構だし、女の覺醒も喜ぶべきだが、女ばかりが覺めた所で、男の方が晝寢の夢では、張合の無いこ

と甚だしい。新しい男が出て、新しい女と握手しない以上、結婚不能の女が出來るばかりで、甚だ以て困つた事になりはすまいか……」と云つて、通譯官は大きな聲で笑つた。

「左樣、新婦人の出現に依つて、世間が賑かになるのは結構ですが、新しい女は厭だとあつて、お嫁さんの口が無くなる。遂には老嬢ばかりが殖えて、隨時隨所に紫の風呂敷包を見ると云ふ事になつては、何だか斯う心細くなりますね。新しい女も若いのは宜いけれども、老嬢と來ては、全く以て遣り切れない、願下げたくなりますね」

と云つて、小說家は小さな聲で笑つた。

「多少の修養ある老嬢と、今の新しい女にて、生理的にも心理的に

も、大分共通の點がある樣に思ふ。新しい女は、考へて居る事を書いたり、公に演說したり、また大びらに實行するが、老嬢の群は何事も云はず、何事も爲ない振をして、唯それを對世間の場合に、斷片的に現はすだけの相違である。何れにしても厭なことぢやないか」

と云つて、私は聲を立ずに笑つた。

笑つた三人の顏には、芳烈なウヰスキーの醉が、大分、紅く浮いて居た。殊にT氏とA氏とは、二重に發した醉の爲めに、唄ふに適い醉心地になつて、バーの方へ降りて行つたが、微醉の私の眼前には、未だ「紫の風呂敷包」がチラ付いて居た。夢か現か、幻の樣に、御苑の夕暮の其の姿を、彷彿として眺める時、私の心は依然として、十年の

昔に暗かつた。

醉はうとしても醉ひ得ない男の淋しさを、自分自身の其の夜に經驗しながら、賑かな群に引入れられる樣な心地で、私は階下のバーに降りて見た。肌寒い雨の夜だと云ふに、强烈な酒の刺戟に依つて、胸の悶えを忘れ樣とするらしい若人が、此處にも彼處にも群をなして居た。中には見知り越しの古い新聞記者や、カフエーばかりを飲み步いて居る洋畫家や、エプロンの胸白い女給仕に懸想して、毎夜の樣にぞめきに來る近所の商店員なども居た。それ等の人々が、何の屈託もなく、何の煩ひもなく、何の惱みもなささうな、華やかな陽氣な調子で、話たり飲んだりして居る樣を、私は美む樣な心地で眺めて居た。

過ぎ來し方に對する執着もなく、行末に眺める野心もなくて、唯、

現在の春や秋に、晨の花に戯れ、夕の月に醉ひ得る人は、眞に幸福てあると思ふ。一身一家の煩ひも、人事世事の不平不滿も、凡てを刹那の醉に忘れて、唄ひつ狂ひつ日々夜々を過し得る人は、眞に幸福てあると思ふ。燈火の巷に歡樂を追ひながら、人々と同じ樣に、歡樂そのものを正面に受入れる心地になれず、華やかな燈火の影に、暗い思を抱くとは、何と云ふ不幸な私てあらう。泣くに泣かれぬ思ひ出に、輕い哀愁を覺える樣な事は、私の月日にも繁くはないが、不圖した事から悄氣返つて、淋しく暗い心になるのは、稀しからぬ例である。今日も亦醉はうとして、努めて飲み努めて語つたのに、心は十年の彼方にのみ馳せて、人々の如くに醉ひ、人々の如くに浮かれ、人々の如くに唄へぬとは、何と云ふ不幸なことてあらう。

勸められる儘に、いろ〳〵の酒を飲んだけれど、遂に醉ふことが出來なんだ。青い酒やら赤い酒やら、卵色したのや、紫色したのや、白いのや黑いのや、種々の酒を飲んだけれど、遂に醉ふことが出來なんだ。通譯官は大學生の群に入つて、英語や獨逸語て盛に女の噂をして居るし、小說家は新聞記者の仲間に入つて、盛に洒落を云つて居るに、私の心は依然として暗く、依然として淋しかつた。

「今晩は、徹頭徹尾、遂に眞面目てすね」

小說家に斯う云はれた時、私は默つて頷頭くより他に、何とも云ふべき言葉がなかつた。

「祟られたんだよ、紫の風呂敷包に……」

通譯官が笑ひながら、大きな聲て斯う云つた時、新聞記者や大學生

が三五人、ドヤ〳〵と私を取巻いて、ビールのコップを擧げた。

「何が入つてるんだい、其の風呂敷包には……」

「怪談紫の風呂敷包なら、泉鏡花の檀場だ……」

「燒芋か、煎餅か、大福か、金つばか……」

「紫の風呂敷ッて、全體、何處にあるのだ……」

「飲め、飲め、紫の風呂敷包、萬歳……」

口々に斯んな事を云つて、私にも一つのコップを持たせた。その時、背の高い通譯官は、

「諸君、このM君と因緣淺からざる一人の女性、姓も名も判らない老嬢のために、乾杯をして頂きたい。その老嬢は、一名を紫の風呂敷包と云つて、所在、生死共に不明ではあるが、兎に角健康を祈

つて頂きたい。M君のために、其の老嬢のために……」

と演説口調で云ふと、居合せた者七八名は、大醉して何が何やら判らぬ中にも、ビールやウヰスキ！や、葡萄酒のコップを高く上げて、

「萬歳……萬歳……萬歳……」

と、バーの中は隅から隅まで、賑かに陽氣に動搖き渡つた。——見ず知らずの人達から、斯うした乾杯を受けたことを、私は「紫の風呂敷包」に知らせて遣りたい。生さて居やうが、死んで居やうが、そんな事は最う問題でない。——

斯うまてされても、私の心は仲間に引入れられる程に浮き立たず、遂に醉ひ得ぬ淋しい足どりて、雨に更けた銀座の町に出た。十二時に近い大通りは、最う人の往來も絶えて、夏の初にしては冷たい風が、

電信柱に氣味惡く吹いて居た。

「紫の風呂敷包」が、又しても眼前にちらつく。

廊下の曲り角

一、牢獄に似た病室

Y君、僕はまた、築地の××病院に入つた。人間も斯んな病院に、一度ならず二度までも入院する様では、最うお仕舞てある。

それも眼病とか、腦病とか、肺病とかて、眼に繃帶したり、頭を氷て冷したり、海氣室て空氣療養でも遣るのなら、如何にも病人らしくて好い。妻も親族も友人も知己も同僚も世間も、これを病人視し病人扱ひにして臭れ様が、僕の様な病氣の種類で、××病院に入つたとあつては、第一家内の者に申譯がないし、生活費を貰つて居る社に對しても、何となく肩身が狹い様て困る。

僕、生れて三十六年、病院の不味い飯を食ふのは、これて恰度三回

目てある。其の第一回は、君と未だ相識るに至らざりし明治二十九年齡十九歳にして京都の×館と云ふ寫眞屋の受付を勤めて居た時、猛烈な脚氣を病て同志社病院に入つて、其の第二回は去年の師走、歌舞伎座て雲入道が浪花節を演つて居た時、今度と同じ様な病氣で、此の病院の三階に入つた。京都ては一ヶ月餘、去年は四週間、今度も此處へ入つてから今日て恰度二週間目になる。三十六年間にたゞの三回とは云へ、其の度毎に一ヶ月もかゝつては、僕の病院生活も、決して短い方てはない。

何んな病氣か、そんな事は不問に附して貰ひたい。兎に角、身體の一局部が或る刺戟に依つて、惡い黴菌の巢ふ所となり、それが段々嵩じて一種の副作用を起したのてある。溫めるか冷すかして、一週間も

安静にして居れば、大概全治して了ふさうであるが、僕のは氷で如何に冷しても、悪くなる一方であつた。患部の方は異常の熱を有つて、化膿しよう化膿しようと傾いて居る處を、冷たい氷で冷すのだから、其處に冷熱の激しい戰鬪が起つて、入院後一週間と云ふものは、何の位苦しみ悶えたか知れない。晝の間はさうでもないが、夜八時九時になつて、廊下を通る看護婦のスリッパの聲が耳敏く響く様になると、熱も三十九度から四十度の間を昇降して、其の苦しさと云つたら無かつた。

去年は、寒い冬だからと云ふ譯でもあるまいが、溫器法で溫め通したけれど、遂に切開手術を受けた。今度は、蒸し暑い夏の初と云ふ譯でもあるまいが、冷器法で冷し通したけれど、遂に外科室の手術臺上

に横つた。在院二週間の豫定で、切開せずに全快する様にと云ふのが、僕の希望であつたけれども、病症の方はさう註文通りになつてくれず、去年と同じ外科室で、去年と同じドクトルに依つて、其の切開手術を受けた。脊髓注射に依つて、切られる所は麻痺して了ふから、手術を受ける間は、痛くも苦しくもなく、注射が覺めてからもさう痛くはないが、最も厭なのは毎日のガーゼの取替である。それも實はホンの一瞬間で、手術後は日一日と快くなる一方だから、今ではそれを樂しみに、毎日、白い病床の上に仰臥して、過ぎ去つた種々の事を考へて居る。

僕の病室は、三階の院長室の隣で、壁も天井も病床も皆白い中に、白い浴衣を着た僕が寢て居るのだから、黑いものは僕の顏と手足と敷

物だけである。三坪ほどの中に病床と、藥瓶や湯呑を置く机と、腰掛が一個あるばかり、昨日見舞に來た或る人が、「一種の牢獄だね」と云つたが、全く獄舍に似た樣子があるかも知れない。僕は今、其の室を壺中の天地として、朝は六時半に起き、夜は十時半に眠るまでの間、書籍を繙くと云ふてなく、雜誌を見ると云ふてもなく、たゞ敷島を燻らして、無爲無能に暮して居る。宅に居れば、近所のオルガンが癪に障つたり、子供の泣き喚くのが厭になつたりして、心の平靜を亂され勝だが、身動きもならぬ病人になつて、「一種の獄舍」に寢そべつて居れば、反つて天下太平で宜い。種々の邪念も起らず、樣々の慾情も生ぜず、「成る樣にしかならない」と斷念めてしまつて、其所に一種の安心も得られる。

然し、病院の月日と云ふものは、決して愉快なものでは無い。病氣が快くなればなるほど、病院生活の寂しさ佗しさが、堪らなく心身を襲うて來る。何とも云へぬ孤獨の感が身に沁みて、譯もなく涙のこぼれる夕暮さへある。斯うして寢て居る間に、寸時も休まぬ時勢の進運に見放されはすまいか、と思ふことがあれば、我と我が技倆や手腕を疑ひ、最う何事も出來ない樣な心細い氣もすれば、また無暗に他人の仕事に感心して、世間の人が悉くエラく見える樣な夜半もある。一小局部の手術の跡が全快するまでの月日を、此の病室に託して居る樣な、輕症の「患者さん」に過ぎない僕にも、病院の日夜は神經過敏になる。窓外の近所の家に、子供の消魂しい泣き聲が聞えると、宅の子供も泣いては居ないだらうかなどゝ、壯健なる日に經驗した事のない氣持に

哀れを覺える場合さへある。生とは何だ、死とは何だ、人生とは何だ、信仰とは何だと云ふ樣な事を、取止めもなく考へて居る間に、あゝ死にたく無いとの恐怖心も起れば、生きて居たい、何時までも生きて居たいとの執着心も起る。病院で食ふ三度の飯が宅の茶漬より不味いのも、考へて見れば當然の事である。

腹這になつて、今日初めて萬年筆を執つた。何時も簿記臺の樣な斜面になつた机で、手紙も原稿も書く癖が着いて居るので、腹這の執筆は人一倍に苦しい。久しく大阪朝日を見ない爲に、君の書いて居る「闇の女」が、其の後何う云ふ風に發展して居るのか、考へて見れば、君にも、君の小說にも、重ね〳〵の御不沙汰である。

二、新聞社内の空氣

Y君、病氣は最う快くなる一方である。××看護婦會から附添に來た。若い野村と云ふ看護婦に向つても、面白可笑しい冗談口が叩ける樣になつたから、先づ以て安心してくれ給へ。

社から貰ふ百圓足ずの僅少な給料だけでは、一家六人の糊口を支へて行くに、頗る非紳士的なるを忍ばねばならぬ僕にとつて、今度の入院は經濟的にも尠らぬ打擊である。半期〳〵に貰ふ賞與金は、最うそれ〳〵の支出に豫定してあつて、一錢の過不足も無い所へ、降つて湧いたのが今度の入院である。幸に近日出版する「人生探訪」の稿料の殘額と、二圓三圓と貯蓄した妻の銀行預金の一部と、或る雜誌へ書い

た原稿料と、或る雜誌へ書くべき原稿料の一部前借とて、百圓餘の金を工面して、取るものも取敢ず入院したが、考へて見れば、眞に心細い境涯である。

お互に新聞記者として世に立つ以上、十年經つても二十年經つても、勳章一つ貰へねば、二千三千の小金？を蓄へることさへ、思ふに任せぬ位の事は、百も二百も覺悟の上であるが、それでも時あつては、金の欲しい事が無いても無い。金の欲しくなる時が、即ち新聞記者一代の危機で、退いては職業に對する自負、自覺、自信が弱くなつたり、進んでは人に對し世に向つて、記者たるの面目を失ふ樣な事を仕出かすかも知れない。僕等はそんな危機に立つた事が、比較的稀ではあるけれども、それでも知らず識らずの間に、危い淵瀨に立つ樣な事が、

長い月日の間には無いとも限らない。今の新聞經營者が、其の社中の靜的少數にのみ高給を支給し、動的多數を遇するに、警察署長乃至警部、警部補程度の支給を以て足れりとして居る間は、僕等を此の經濟的危機より救つて、安易の位地に置かれることは、先づ絶望と云つて宜からう。

僕の樣な無學な者でも、新聞や雜誌で多少名を知られて居るのか、新聞記者になりたいから世話してくれとか、書生に置いて下さいなどゝ云つて、手紙を送つたり訪ねて來る者が、毎月必ず五人から十人位はある。僕は甚だ相濟まぬ事とは思ふが、手紙を寄來す人には大概返書を出さず、訪ねて來る人には努めて逢ふ樣にして居る。そして其の人の風采、態度などを見た後、志望最も熱心な者には、先づ新聞記者

と云ふ職業が、職業として認められて來たのは、近い此の四五年來である事を語つて、新聞記者になつて、飯を食ふと云ふ事の甚だ至難な次第を知らせて居る。新聞記者にならうとして、新聞記者になり得た僕、新聞記者の職業を以て、宰相、將官よりも貴しとして居る僕が、新聞記者志望の青年に向つて、新聞記者の生活難、出世難を語るのは如何にも矛盾して居る樣であるが、新聞記者の世間に於ける一部のみを見て、忽ち記者熱に犯される樣な青年に向つては、此の位の事を云はねば駄目てあると思ふ。

それに君も知つて居る通り、新聞社内の空氣は、官署や銀行會社などゝは異つて、協同生活の最も難かしい所である。世間に其の存在をさへ知られない者が、社中に於て重要な幹部の地位を占めて居るかと

思へば、世間でやんやと評判され取沙汰され、恰も其の社の代表的記者の如く認められて居る者が、社中では重きを置かれず、失意不遇の境涯に押籠められて居る樣な例も、廣い新聞界の中には、決して稀有の事てはない。優勝劣敗の最も激しかるべき新聞社中に於てすら、技倆あり手腕ある者必ずしも用ゐられず、僕の樣な平凡鈍才碌々たる者と雖も、其の日〳〵のお茶を濁して行かれる以上、こゝも亦普通の世間てある。僕は新聞記者志望の青年に向つて、こんな事も語るし、また文章が上手だからと云つて、それが好い記者とのみ限らない、探訪が巧いからと云つて、それが手腕ある記者とは云へぬ。世渡りの上手下手よりも、一つは運不運もあると云ふ樣な事を話して、相手を煙に巻いて居る。僕などは、斯うして病氣して病院生活を送つて居ると、

心も身も弱くなつて、新聞記者の職業が、この世に何の反響も傳へない、空しいものであると思ふ事さへあるに、世間一部の青年が、新聞記者に爲らうとして、苦み悶えて居る樣は、實に滑稽であり、悲慘である。

僕一人だけは、何う考へて見ても、今まで歩いて來た道を、たゞ一直線に進むのが、運命でもあり、使命でもあり、天職でもある樣に思ふ。今度の病氣は、入院と云ふ顯明な事實があるだけに、品行方正面する僞君子の群には、僕にとつて不利なる辭柄を與へたかも知れぬが、然し僕自らは、今度の入院に依つて、人知れぬ修行をした。所謂「一種の牢獄」に似た病院の窓下で、僕は何一つとしてまとまつた事を考へなかつたけれど、此の淋しい幾日間は、容易に得られない病氣の恩

惠である。樣々な都會の刺戟に依つて、荒み切つた僕の感情に、一點「孤獨」の哀愁を覺えさせたのは、全く病院生活の賜である。百餘圓の金は、經濟的には苦しいけれども、これを精神的に償ひ得て、尙餘りあるを覺える。劣け惜みではないが、人間も時折病氣をして、病院に入つて見る方が宜い、君は何と思ふ。

大阪に旅せざること二年、切に大阪の酒を懷しみ、大阪の料理を欲つし、大阪の女を戀し、大阪の生活を想ふ。大阪へ行けば、進んで大に開拓すべき「新聞記事」の材料が、其處にも、此處にも、落ちて居る樣な氣がしてならぬ。新聞の首都は、段々大阪に移つて行くのかも知れない。

大阪に行つた君は、僕よりも幸福である。

三、看護婦の白い服

Y君、腹這になつて書くことが、大分上手になつた。長い間續けて書いて居ると、胸が押詰まつて苦しいし、兩手の肱が痛くなつて困るけれど、時折、体んで書きさへすれば、腹這の執筆も頗る妙である。

氣も心も、未だ病人らしい上に、手術の痕が前途甚だ遼遠である。斯うして手紙を書いて居れば、病人らしく無いと思ふかも知れぬが、日に三四回の小便も、一二回の大便も、未だ看護婦の厄介になつて居る。それでも大便だけは、痛いのを辛抱して、便所へ立つて行くけれど、小便だけは横に寢た儘で、長い硝子製の便器の中にして居る。今度の入院で、僕が初めて經驗したのは、曰く「腹這で萬年筆の執筆」

と、「横に寢た儘で小便」の二つである。

看護婦と云へば、今度、僕の附添になつた野村と云ふのは、名を幸子と云つて、未だ十八歳の若い娘である。講習中の勉强盛りで、看護婦の免許も、産婆の免狀も有つて居ないが、斯うした病院で、斯うした病人の附添看護婦となるには、免狀の有無など問題にならない。美人と云ふてもなく、男の心をそゝる類の女でもないが、笑ふ度に右の頰へ片笑靨が出來て、それが何となく可愛らしい。白い看護服を着て居れば、何の女も一つに見えて、個々の有つて居る容色を平均して了つて、誰が誰やら判らなくなるのが常である。野村も亦その個性を白い服の中に包まれて、看護婦らしく振舞つては居るが、實は看護婦としてよりも、娘としての氣分に勝つた方の女に見える。一人前の看護

婦として、重患者を取扱ふまでには、未だ〳〵長い修行を積まねばならぬ女の樣である。

生れは群馬縣ださうて、産婆になるのが目的で、東京へ出たと云ふ。國には父もあり母もあり、何うせ不如意な家庭に育つたであらうが、其の戀知らぬ顏には、悲しい痛ましい過ぎ來し方の影が無い。世には家貧しいために、淪落の群に入る女もあれば、美しい容色を有つた爲めに、新女優となる女もあり、生活の爲めに電話交換手となるがあれば、欺かれて女工に落る女もある。娘十八にして、稼すべき道を横に外れて、自ら稼ぎ自ら食ふ群の中に、運なればこそ看護婦の白い服を、博愛の化身と見るのか。僕は此の二週間餘を病院に暮して、しみ〳〵と看護婦の仕事を見た。帝劇の女優にならねば、せめて女案内人でも

と、若い娘の群を擧げて、華麗な世に憧憬れて居る時節に、看護婦にならうと志す娘の心は、何處までも尊重したい。たとへ夫れが辿るべき道に迷つて、仕樣ことなしの切迫にしても、其の志業は貴く清い。野村の樣な若い娘は、看護婦などに爲らずとも、他に幸福な月日があると思ふのに、本人は白い服の穢れを氣にしながら、朝な夕なの檢溫器に、例の片笑靨で微笑むて居る。

世間は廣く人は多い、澤山な看護婦の中には、貴く清い職分を忘れて、女心の狂ひ易く、戀に憂さ身を窶すもあらう。看護婦と云ふは名ばかりの、私唱に似た行爲に月日を送つて、悔ず悲しまぬ女もあらう。人いろいろ、世さまく、、事には表も裏もあらうが、兎に角看護婦の任務は美しい。厭な思をするに反比例して、僅少な報酬しか得られな

いにも拘らず、看護婦の任務は、其の人の生命そのものを犧牲とする所に、清く美しく貴い職分の光がある。看護婦の習ひ覺える知識としては、醫學もホンの通俗な初歩の生理、解剖學や、看護術、繃帶術に過ぎぬけれど、繃帶の卷方にも、百通り以上あれば、看護術にも屍體の手當など、隨分、厭な事がある。女優は長唄の稽古をしたり、踊を習つたりして、脂粉の香に若い娘盛りを美しう飾り、晴の舞臺に立つけれど、看護婦は世と隔つた病院の中、陰慘な空氣の漲つて居る所で、日夜を白服で過して居る。

僕は今度の入院に依つて、努めて看護婦若くは看護婦にならうとする女の心持やら、云ふ事やら爲る事やらを觀た。所謂新しい女の一部では、今更の樣に「婦人の經濟的獨立」などを說いて、新しがつたり

强がつたりして居る樣子だが、女が自營自活すると云ふ事が、てあり何の幸福であらう。出來得べくんば、世に在る女の總體を、嫁して人の妻とならしめ、正しい生殖の大道を行つて、强健なる種族を此の世に提供するのが、生れて母となるべき約束の下にある女の天職である。海の彼方には、參政權運動などを遣らかして、男も尙且つ躊躇する樣な亂暴を敢てして、得々たる女が澤山あると云ふが、考へて見れば厄介千萬な時節になつたものである。婦人の覺醒も宜からう、婦人の自覺も宜からう、獨立自活と云ふ事にも、多少の理窟はあらうが、考へて見ればベラ棒極る話である。

彼是と議論して、騷ぎ廻る女の群よりは、不如意な運命にも泣かず悲しまず、女の行くべき第二の道として、白い看護服を選んだ群の方

が、何の位、意味深いか知れない。我が野村さんは、斯うして看護婦會から派出されて、重からぬ病人の世話をしながら、閑暇ある毎に、「看護婦用語集」を開いては、赤鉛筆で記憶點を附けて居る。「看護婦や産婆などにならずとも、然るべき嫁入口を求めて、細君になつた方が好いと思ふにねえ」と云ふと、彼は例の片笑靨でニコとしながら、「お嫁になんか、一生涯參りませんわ」と笑つた。

病院生活がボツ〳〵單調になつた。早く世間に出たいけれど、患部の方が未だ承知しないので困る。

四、肺病列傳の人々

Y君、今度は誰にも知らせず、默つて入つて默つて出る積であつた

が、それでも日に三四人の見舞客があつて、大に心強く思つて居る。病氣して居る時には、僕の樣な男でも何だか心細くなつて、悲觀的に傾くものであるが、今度は努めて、何事も考へずに暮して居る。

自分の身上に就ては、現在も未來も無念無想であるが、終日終夜寢そべつて居る間には、過ぎ來し方の幾春秋が、走馬燈の樣に浮かんで來る。場所が病院であり、相手が一人の若い看護婦であるだけに、華やかな遭遇よりも、暗い陰森な思ひ出が、それからそれへと斷續する。果は、京都の大學病院で、肺に死んだ親友永井定太郎、山田桂華、平尾不孤などの在りし世の事どもが、凄慘な繪卷物でも展開げる樣に、強く烈しく夜半の幻覺に映つて、思はず冷たい汗を流す事さへある。

僕の親友、知己の中で、若うして死んだ多くの人々は、皆、肺病の

ために斃れた。米國の寫眞學校を卒業して歸つた永井定太郎、醫師となるべかりし玉井一二郎、大阪新報記者たりし田中稻月、加藤啞蟬、脚本作家となるべかりし山田桂華、大阪毎日新聞記者たりし山下雨花、新演劇の作者たりし畠山古瓶、劇場の背景畫家たりし北村金次郎、洋畫家として前途のあつた渡邊亮輔、文藝批評家にして創作家たりし平尾不孤、新文藝勃興の先驅者たりし詩人國木田獨歩、新々歌壇に新樣の歌風を傳へた歌人石川啄木など、不用意の間に、一寸、思ひ出しただけても、十指に餘るほどある。此の中には君の知人も五六人ある筈だが、僕はこれ等の肺に死んだ亡友を、永久に記念するために、「肺病列傳」一篇を書かうと、三四年前から心掛けて居るけれど、未だ果さずして今日に及んで居る。

未定稿「肺病列傳」の人々は、何れも僕にとつては淺からぬ因緣があつて、誰彼と親疎の差別はないが、昨夜は妙に京都の大學病院が、夢現の間に思ひ出された。京都の大學病院は、永井、山田、平尾の三人が、若い其の生を終つた所であるが、其の前後の光景よりも、臨終前後に見た何の因緣もない背景や、背景に現れた看護婦の姿が、強く鋭く枕に通うた。茅ヶ崎の南湖院に國木田獨歩を見舞つて、終に永眠した後一ヶ月と云ふものは、何う云ふ譯か惡夢にのみ襲はれて、僕自身が肺病に罹つて、南湖院へ診察を受けに行つた夢を、一度ならず二度三度も見た。僕を診察した南湖院の醫師は、背の高い鬚の濃い人で、右の拇指を示して「君の肺には、こんな黴菌が居る」と云つた、それが小說家の眞山青果君であつた事も、二三度の夢枕に現れた。それか

ら後と云ふものは、僕も肺病になるかも知れない、と云ふ様な氣持がして堪らず、社用を帶びて北里研究所へ行つた時、試に診察して貰ふと、「肺病の方が恐れて逃げる」と笑はれて、漸く安心した事もあつた。

それに今度は、京都大學病院の夕暮れ、藥臭い長廊下の曲り角て、二三度行き逢つた看護婦の姿が、幽靈の様に記憶の底から浮かび上るのみて、列傳中の人々が個々に有つて居た運命などは、別に讀まうとも何とも思はないから不思議てある。

平尾不孤の時も、山田桂華の時も、見舞に行き得なかつたけれど、永井定太郎の時には、一二度、病院の長い廊下を通つた。病院と云ふ所は、自分が入つて居ても、心持の好くないものだが、入院中の他人を見舞ふ場合には、たとへ其の病氣が、自分とは沒交渉なものてあつ

ても、決して氣持の好いものてはない。況んや既に絶望を宣告された、重態の肺病患者を見舞ふのだもの、患者其の人と自分との關係などは超越して、其處に何とも云へぬ不快と不安の氣が漲る。相手の前て平氣な面をして然るべきか、或は嘆き悲しんでも宜いか、何事も病人に氣兼をして、默つて控へて居るのが宜いのか。凡そ重患者を見舞ふ時ほど、思ひ煩ふはなく、重患者と相語る時ほど、苦しく痛ましく悲しきはない。殊に肺病患者は意識が明瞭で、氣持も確りして居るから、今夜か明日かと云ふ場合にも、人情として泣き顔を見せたくないものてある。

僕は傳染病室の中て、瀕死の人と二三十分位談話を交へて、直ぐ普通の病室へ通ずる廊下に出て、深いため息を吐いた。嵐山の櫻花は最

う散つて、草も樹も綠にならうとする時節、季候の移り變るあわたゞしさに、何か知ら涙催さるゝ夕暮であつた。掃除の行屆いた病院は、隅から隅まで靜まり返つて、壯健なる者も、斯る夕、斯る所で死ぬるの幸福を思ふ時、涙は止め度もなく零れ落つるものである。僕は其の時、彼方の廊下の曲り角に立つて、夕暮の空を眺めて居るらしい。背のスラリとした一人の看護婦を見た。何科に屬する何と云ふ女性であつたか、昔も今も知らずして打過して居るが、其の白い神々しい姿は、今も尙ほ忘れ得ない思ひ出の一つである。

他日「肺病列傳」を書くの時、僕は「廊下の曲り角」に見た其の一看護婦を點出して、小說的色彩にしようと思つて居る。僕の樣な病氣の附添看護婦などは、同じ看護婦の中でも、極めて容易な仕事であらうが、

內科や外科の重患者になると、眞に生命懸けの仕事であらう。戀に微笑み、歡樂にはしやぐ妙齡を、陰氣な病院に送つて居る看護婦を思ふ毎に、僕は何となく一種の美しい哀れを覺える。

取止のない事ばかり書く樣だが、斯うして毎日、君に宛て手紙を書くと云ふことが、此の頃の僕の日課であり、また慰藉である。あゝ僕等は遂に、「書かずには居られない」一種の動物であるかも知れない。

五、戀に落る危險性

Y君、退院の日も、段々近づいて來た。醫師の說に從へば、最う一週間餘も在院する方が、經過の上に好いと云ふけれど、三週間目には、何うしても退院する豫定である。長く居れば金の豫算に差響くのみで

なく、第一病室内の單調に、閑殺されて了ひさうである。

僕の附添看護婦野村幸子は、看護婦の未成品だけれども、十年前、京都大學病院で、廊下の曲り角に見た看護婦は、女としても成熟し切つて居たし、看護婦としても一人前の女であつたに違ひない。その當時二十五六の僕が、最う三十六歳になつたのだから、當時二十一二に見えた女も、最う三十以上になつて、人の妻になつて居るか、看護婦會でも經營して居るであらう。何と云ふ女であつたか、姓名も判らぬが、親友永井定太郎の死を思ふ時、「廊下の曲り角」は、其の一表徵の樣に、夢でもなく現でもなく、明瞭に浮かんで出る。

僕は其の後、京都醫科大學に學んだ友人に依つて、看護婦に關する種々の興味ある物語を聽いた。身を以て患者に對する看護婦の逸話に

は、其の清く美しい氣高さに、落涙することが珍しくない。內科などの難治な病氣になると、「一に看病、二に藥」など云ふが、全く病氣の全快と否と、或は快癒の遲速などは、看病の宜しさと然らざるとに、多大の關係があると云ふ。殊に誰も厭がる傳染病の看護婦は、一歩誤れば自分にも傳染すると云ふ危險があるだけに、並大抵の骨折ではあるまい。男と女とを問はず、何んな職業にも、苦しみがあれば悶えもあり、不安があれば危險も伴ふが、女の職業の中では、看護婦ほど死生の境に出入して居るものはない。單にこれを職業としてのみ視ず、博愛人道の上より意義あるものとして、清く美しきものにされて居るのも、當然の事であらう。

然し彼等の多くが若い女であり、未婚の婦人である以上、其處にな

た人情の幾波瀾が渦巻き起る。殊に、日々夜々相接して居る患者が、異性である場合には、彼等は其の職業の性質上、戀愛に落つべき幾多の危險性を備へて居る。看病の極意は、患者の氣分や生活狀態に同化して、これを洞察し、これに同情し、患者の苦痛を以て自分の苦痛となし、患者の喜悅を以て自分の喜悅とするにありと思ふ。看護婦の此の獻身的努力は、職務に忠實なと云ふ他に、何の意味も無い場合でも、それを感謝する患者の心と、不圖した刹那に相觸れる時、即ち人情の波に漾ふことになる。行屆いた看病の親切に依つて、看護婦その人の情を思ひ、或は其の人柄性質を懷しんで、娶つて妻とした樣な例も、廣い世間には澤山ある。看護婦の職務的立脚地から云へば、患者と戀に落ちるなどは、既に其の天職を忘れた墮落の行爲であるが、相

手が異性である以上、遂に免れ得ない一種の危險性である。たゞこれを正しく爲し、世間晴れてする所にこそ、認容して然るべき理由あれ、情感の狂旺する所、痴態を盡して憚らぬ群に至つては、嘲けるべく憫れむべきである。

此の病院で、看護婦副長を勤めて居る人は、最う四十年配の寡婦で、二十七歳にして良人なる人と別れて後、今日まで十五六年の間を、看護婦として過した人である。この副長さんは、僕の病室に廻つて來ては、能く種々の話をして、「妾の過ぎ來し方は、立派な小說になりますよ」と云つて、笑ふのが常であつた。何でも重態の患者を看病して、一月なり二月なりを立派に務め終はせた者が、初めて一人前の看護婦ださうで、左樣した至難な重症患者を取扱はねば、看護婦としても

未經驗な、世に立つ資格の無い者らしい。今日でも看護婦の志願者は、地方の多少文字ある娘の群に多く、年々多數の人々が上京して來るが、多くは見習勤務や講習中に、辛抱が出來なくなつて、中途で志業を變じる者が、十分の四までに達すると云ふ。其の十分の四も、過つのは色戀の沙汰であつて、弱い娘の心は、都會の刺戟や誘惑に打ち勝つこと出來ず、遂に邪道へ外れて了ふのらしい。

さうして殘つた十分の一が、看護婦として世に出るべく、長い間の修行を積むのである。修行を終へて、一人前の看護婦になつても、生涯を白い服で過す人は眞に數へるしかなく、其の多くは人の妻となつたり、底知れぬ溝の中に落ちたりして、一生を終るのらしい。婦人の經濟的獨立などを說く新しい女は、少しく斯うした方面にも着眼して、

四の五のと議論はするものゝ、女は遂に男の下に隨從すべき動物であることを、自覺する方が宜からう。一生を男の厄介にならず、男には最う懲りたと云ふ類の女は、主として變性男子か、寡婦か、老孃（オールド、ミス）などで、彼等こそ新しい女の議論を實行しつゝある、齡老いた一種の「新しい女」である。誰が何と云つたつて、女は男がなくては、一日も立行く事の出來ない人間である、弱い、乏しい、受動的の人間である。到底、男の風上には、置くことの出來ない、一等下級の人類だと云つても宜い。

「廊下の曲り角」から、飛んだ事まで書いて了つた。病氣して入院して居ると、取止めもない雜多な事が思ひ浮んで、何だか斯う世間を罵つたり、人を嘲つて見たくなつたりする。其の癖自分は大に悄氣て、

心細い淋しい孤獨の感に堪へられず、一日も早く退院したい、一日も早く世間に出たいと思つて居る。

窓外の景色は、最う全く夏になつた。退院したら、大阪へ行つて食いたい、遊びたい。

六、社會制度の破壞

Y君、いよ〳〵三日後には、退院する事になつた。讀まうと思つて持て來た本も、碌に讀了しない間に、手術の痕は日一日と癒えて來た。此の前は左樣でも無かつたが、今度は何だか宅が戀しくて、一日も早く歸つて、子供等と一所に遊びたくて仕樣がない。

病院の横手には、勞働者の汗する荷車が通る、藝妓を乘せたゴム輪

が通る、西洋人を乘せた自動車が通る。都會の色と匂と響とは、此の病院にも日夜見舞つて居るに、我が野村看護婦は、世間を思はず、榮華を思はず、戀を思はず、死を思はぬのか。例の片笑靨で納り返つて、娘十八の若き日を、惜むでもなく、恨むでもなく、たゞ白服の穢れを氣にして居る。僕は無聊に苦しむ朝な夕な、此の野村さんに向つて、隨分思ひ切つた冗談口を叩いたが、野村は何を云はれても平然たるもので、近頃は「戀の迷ひ」と云ふ資本を耽讀して居る。

此の病院にも、隔日位には貸本屋が入込んで、病室を廻つて居る。新刊物は何一つも無く、名も知れぬ作者の戀とか罪とか、悶えとかを題名にしたものが、最も看護婦仲間に受けるとか。僕は持つて來た「みゝづのたはこと」を出して、其の中の「梅一輪」と題する所を開き、野

村に「讀て御覽、涙の零れる事が書いてある。外國の看護婦學校へ行つて、長い間苦勞した甲斐もなく、病氣の爲に死んだ女の事を書いてある」と云つたけれども、野村看護婦は一寸手に持つたのみで、また「戀の迷ひ」を讀み初めた。何でも無いこんな事て、一般看護婦の趣味性を是非するのではないが、娯樂のために讀む本でも、それに依つて大概その人の情性を窺ふことが出來る。野村さんは齡も若いし、戀に迷つた經驗も無いので、反つて「戀の迷ひ」と云ふのに好奇心を抱いて、それで愛讀して居るのであらう。

凡ての看護婦は、皆、「廊下の曲り角」に立つべき約束の下に、「病院の下女」たり、「病人の女中」たる任務をして居るらしい。彼等の多くは、看病に必要な學問を修め、看病に必要な技術を習ふのが精一杯で

讀書とか修養とかに、それ以上の餘裕があらうとも覺えぬ。從つて眞に看護婦の職業を、婦人の天職と自覺して、一身を不幸な病者の犧牲にするだけの覺悟て、進んて奮つて看護婦になる樣な女は、百人の中に幾人あるか心許ない。彼等の多くはたゞ身境の不如意に切迫詰つて、何とかして自分一人の渡世を餘儀なくせねばならぬ結果、何うにも此うにも仕樣がなくて、看護婦と云ふ一つの職業を選擇するらしい。そして一年なり二年なりの修行を積む間には、職業に對する趣味を覺え、自覺も出來るし信仰も感じて、職業そのものに傾倒し、同化する樣になる。けれども數多い中には、自ら看護婦として四五年の歲月を過して居ながら、何時まて經つても職業上の意義を理解することが出來ず、毎日毎日厭な思をして、不愉快さうな顏をしつゝ、任務めて居る

な徑路を辿るやうになるのか。入院前から「大阪朝日」を讀まないために、其の後の「事件の發展」を知らないが、思ふに其の個性描寫は、今の婦人問題と接觸する點があらう。僕は君の處女作が、多數の新聞讀者に喝采されるのみでなく、婦人問題の一部と交渉する處淺からぬ點に、君の新手腕を讀まん事を望み、君の努力を見ん事を願ひ、君の婦人觀を聞かん事を熱望する第一人である。

今日は珍らしく婦人の見舞客が、朝から二三人來た。それが皆、然るべき母や細君でなくて、それ〴〵「職業」を有つて、自ら稼ぎ自ら食つて居る人々であるから不思議である。僕の樣な愚論を云ふ男にも、「經濟的獨立の婦人」に、多少の知合があるから可笑しい。

近日愚文惡文集「人生探訪」を出版するから送らう。今度の入院記念

として、恰好な本である。

七、天職に殉する心

Y君、主觀的と云はうか、獨斷的と云はうか、愚論と云はうか、惡說と云はうか、毎日つまらぬ事ばかり書いて、君を惱ますの罪淺からぬ。僕の樣な頭腦の明晰？な男も、病氣して病院に入つて居れば、神經衰弱になつて矛盾した事ばかり云ふ、何事も病氣のせゐだと思つて、大目に見て貰ひたい。

今日、外科主任のドクトルに相談したら、實を云ふと最う一週間前後在院して、傷が半以上癒えてから退院する方が、理想的ではあるけれどゝ、貴君の方の都合もあらうから、先づ明日退院しても好い事に

者をも見受ける。何んな職業にも苦勞があれば厭な事あるに、辛苦の外に超然として、職分に終始する事が出來ず、不平不滿の月日を送つて居る樣な例は、男の仲間にも尠らずある。況して男より弱い女の群に、職業の爲めに婚期を過ぎつゝある若い女の群に、厭な月日の多いことは、別に不思議でも何でもない。これも亦、婦人の職業に伴ふ一種の危險性として見る時、其處にも亦人知れぬ不安があり煩悶がある。

病院へ入つて見たり、病人に爲つたりして見ると、看護婦の有り難さが身に沁みるけれど、僕に若し女の子があつたなら、如何に不如意窮迫に陷つても、看護婦などには爲らせまいと思ふ。看護婦も亦この社會の一部を組織する上に、無くてならぬ大切な職業ではあるけれど、

僕は相知つて居る交友の仲間に、一人の看護婦も有つて居ない事を、上帝に向つて感謝したい。僕の言ふ事は舊い男の愚論で、婦人問題の新思潮を無視した、時代の流を知らぬ愚說だと云つて、世間の所謂識者達から、鋭い嘲笑を受けるかも知れないが、僕は一個の男性として、何處までも女を屈從させたい、奴隷視したい、玩弄物視したい。僕を生んだ「母」と、僕の內助者たる「妻」の外に、此の世の中に、尊重すべき婦人が何處にあらう、敬愛すべき女が何處にあらう。妻たり母たるを欲せざる新しい女が、相當の理由を抱いて世に現れ、世間も亦これを識認する時、社會制度の基礎は、根抵から破壞されることになる。

君が新聞小說壇に打つて出た處女作、「闇の女」の女主人公は、何んな思想を抱いて居る女性か、如何なる境遇や運命に支配されて、悲慘

な徑路を辿るやうになるのか。入院前から「大阪朝日」を讀まないために、其の後の「事件の發展」を知らないが、思ふに其の個性描寫は、今の婦人問題と接觸する點があらう。僕は君の處女作が、多數の新聞讀者に喝采されるのみでなく、婦人問題の一部と交渉する處淺からぬ點に、君の新手腕を讀まん事を望み、君の努力を見ん事を願ひ、君の婦人觀を聞かん事を熱望する第一人である。

今日は珍らしく婦人の見舞客が、朝から二三人來た。それが皆、然るべき母や細君でなくて、それ〴〵「職業」を有つて、自ら稼ぎ自ら食つて居る人々であるから不思議である。僕の樣な愚論を云ふ男にも、「經濟的獨立の婦人」に、多少の知合があるから可笑しい。

近日愚文惡文集「人生探訪」を出版するから送らう。今度の入院記念

として、恰好な本である。

七、天職に殉する心

Y君、主觀的と云はうか、獨斷的と云はうか、愚論と云はうか、惡說と云はうか、毎日つまらぬ事ばかり書いて、君を惱ますの罪淺からぬ。僕の樣な頭腦の明晰？な男も、病氣して病院に入つて居れば、神經衰弱になつて矛盾した事ばかり云ふ、何事も病氣のせゐだと思つて、大目に見て貰ひたい。

今日、外科主任のドクトルに相談したら、實を云ふと最う一週間前後在院して、傷が半以上癒えてから退院する方が、理想的ではあるけれどゃ、貴君の方の都合もあらうから、先づ明日退院しても好い事に

しませうと云はれた。今年の正月から碌に仕事をせず、社に對しても申譯が無いと思つて居る處へ、今度の病氣であるから、經濟的の關係が無くても、一日も早く退院したい。そして、何か讀者受のする讀物でも書いて、大に氣を遣らうと思つて居る場合だから、いざ退院と云ふ事になると、僕も亦世間の一人になれると云ふ喜悅の情に、心も飛び立つばかりである。

我が野村さんを初め、看護婦會から派出されて來て居る人々にも、大分心安くなつたが、いよ〳〵別れねばならぬ日が迫つた。僕一人は氣味の惡い藥の香が漂ふ病室を離れ、陰慘な空氣に充ちた病院を出て、花やかな世間の人と爲り得るけれど、附添看護婦には容易にそんな月日が來ない。日々夜々、不氣味な病人を送り迎へして、櫻花が咲いて

も、螢が飛んでも、月が照つても、雪が降つても、彼等は世の行樂を病窓の外に眺めて、白い服に起臥せねばならぬ。たゞ重患者が輕症となり、輕症者が全快して、病院の玄關を立出づる時「お芽出度う御座います」と云ふ。それが唯一の慰藉であるとは、何となく哀れ深い。自分の手に掛けて介抱した患者が、全快の喜悅を抱いて病院を出る時、一種の誇と愉快を覺えて、人知れず微笑む處に、僅に其の勞苦が酬いられるとすれば、世に看護婦ほど淸く美しい榮ある職分はあるまい。

僕は野村看護婦の勞を慰めるために、「退院したら電話をかけるか、又は手紙で知らせるが、一日僕の宅へ遊びに來ないか。大に御馳走をして、妻と一所に芝居でも見に行つては何うか、慰勞の爲に……」と云つて見た。齡の若い野村の事であるから、何と答へるかと顏色を見

て居ると、野村は「有り難う御座いますけれど、患者さんのお宅には參られません。退院なさいます時に、お送りする事さへ出來ないのですもの、最うお言葉だけて澤山てすわ」と云つて、片笑靨で笑つた。

そして「會の方へ歸りますと、一日二日の休養は出來ますけれど、何時何んな場合に、病家や病院から聘らせて來るか知れません。妾等は斯うして正月から師走まて、種々な患者さんの看護をして、月日の經つのも知らないて過すのてす」と云つた。看護婦になつた以上は、凡ての歡樂を他所に見て、病人と始終するのが天職であらうけれど、斯うした言葉を若い看護婦から聞くと、何とも云へぬ哀を感ずる。殊に、明日が退院と云ふ今日だけに、僕は斯うした病院に殘つて、戀盛りの若い日を、何の榮もなく送らねばならぬ彼等の群が、可哀相な樣な氣

がして堪らない。出て行く人々に「お芽出度う」を浴びせかける、其の言葉は傳習的にして、無心の間に出るとしても、それが彼等の生活に、何の交渉あるお芽出度さてあらう。今朝お芽出度い人を送つても、今夜はお芽出度からぬ人を迎へて、斯くて繰り返し行く附添看護婦の月日ほど、世に陰氣なるはなく、世に味氣なさはあるまい。

斯うして看護婦の身の上に就いて、種々と思ひ煩つて居る時、又しても浮び出るのは、京都大學病院の「廊下の曲り角」てある。夕暮の雲の行く方を見て居たらしい彼の女を、今、眼前に見る心地がするのは、此の病院の廊下てある。京都の夕暮には、親友永井の死を背景としたゞけに、今日に至るも忘れ難い强い印象が殘つて居る。肺で死んだ永井の生涯に、海を隔てた熱烈な戀があつた樣に、永井の死んだ病院の

廊下で、夕雲を眺めて居た看護婦の上にも、涙多い戀があつたかも知れない。此の病院の廊下に見る看護婦は、僕に似た病人の群を背景にするだけて、其處に何の興趣もなく、其處に何の詠歎もない。京都大學病院の廊下に立つた女は、其の後何うしたか知らないが、此の病院の廊下に立つ群は、時にゲラ〳〵と笑つたり、時に小聲で奈良丸くづしを唄つたり、時に「患者さん」の取沙汰などをして、樣々な笑ひ方に興じて居る。

明日が退院だと云ふ僕の喜悅を、自分の悅とする譯てもあるまいが、野村は最う嬉しくて堪らないと云ふ樣子て、繪はがきなど買つて眺めて居る。「國から祖母が參りますから、妹へ土產に送るのてす」と云つて、子供のいたづらを書いた書面を見詰めては、面白さうに笑つ

て居る。看護婦の免狀を受けて、更に產婆の試驗を受けるのが、目的てあると云つて、野村の心は其の事にのみ張り切つて居る。產婆なんかにならずに、產婆を雇ふ樣になるのが、生涯の幸福てあると云つても、患者さんの言ふ事などに、動ささうな樣子はなく、其の心は前途に燃えて居るらしい。

職業に貴賤なしと云ふ事を、子供の時から能く聞いたが、最も貴むべきは、「天職に殉する心」てある。考へて見れば豈單り看護婦のみに非ず、お互「新聞記者」の如きも、此の心掛けが有ればこそ立行かれるのてある。僕が「看護婦」を憫れむ樣に、世間ては「新聞記者」を、憫れんて居るかも知れない。

時には、大阪の樣子を知らせてくれ給へ。

八、病院で得た興會

Y君、病院で手紙を書くのも、いよ／＼今日限りとなつた。今夜は二十一日目に歸宅して、懷しい書架の傍で、子供達と枕を竝べて寢られるかと思ふと、實に何とも云へず嬉しい。退院しても當分は、通院治療を受けねばならぬが、先づ何よりも好きな電車に乘つて、東京の世間に觸れると云ふ事が、僕にとつては、意味あり價値ある生活の一部てある。

今度の入院を好い機會にして、看護婦二三の閲歴を探訪し、それを京都に於ける「廊下の曲り角」に點出して、一種の非小説を書く積で居たが、果さぬ間に退院の今日となつた。こゝの看護婦副長などには、

過ぎ來し方に二つ三つの小説があるのに、其の斷片をも拾ひ得ぬ間に、いよ／＼退院と云ふ日が來た。如何なる場合に、何んな所へ行つても、副産物を取つて來ぬ事の無い僕も、今度の入院中だけは「人生探訪者」として無爲無能てあつた。初の一週間は熱で苦しみ、中の一週間は傷て苦しみ、餘の一週間はガーゼの取替て苦しみながら、こんな事を云ふと、慾の深い人間だと云つて、笑はれるかも知れない。

兎に角、看護婦だと云へば、神様の樣に尊敬する人々があるかと思へば、賣笑婦同然に取扱ふ世間もある。其の職務上、異性と交渉する處が淺からぬだけに、樣々の誘惑もあれば誤解もあり、立派な一人前の看護婦として、模範的の生涯を送らうとするには、並大抵の努力ては及ぶまい。僕も今日までに、看護婦に關する美談を聞いて、落涙し

た事も度々あるが、また看護婦にあるまじき醜行を聞いて、眉を顰めた事も度々ある。女優でも、交換手でも、女教師でも、女店員でも、工女でも、女學生でも、其の仲間に一二の不品行者が出ると、誰も彼も皆不身持の樣に取沙汰されるのが、今の世間の通有性である。若い看護婦でも其の通りて、患者と通じたとか、お尻が輕いなど云はれると、其の職分が清く美しくあるだけ、それだけ世間から兎や角と取沙汰される。事にも物にも表裏があつて、事々物々を一概に看過する譯には行かないが、看護婦だけは何處までも、清く美しくあつて欲しい。

二十日なり三十日なりを、看病して貰ふ女だもの、人情として美しい容色の看護婦を好む。其の病人が男であると女であるとを問はず、美なるものを欲するのは、自然の人情であらう。然し數多い看護婦の

中に、群を抜くほどの美人があるか何うか、頗る疑はしいと共に、看護婦だけは、容色の美なるもの、必ずしも優秀な人とは云へない。反つて人並勝れた容色が仇となつて、若い女の誰てもが落ちる穴へ、知らず識らずの間に墮落する者の方が多い。看護婦たらんとする女の唯一資格を、醜婦に限ると規定するにも及ぶまいが、華やかな世界を外に見て、陰森な病室に病人と共に起臥する女には、自分の容色に就いて、何等の自負心を有つて居ない者の方が宜い。若い女が看護婦になろうとする動機は、種々樣々あらうけれど、世に優れた美貌を有つて居る女が、榮あり光ある他の道を捨て、淋しい此の道を辿る樣な例は、百人に一人もあるまいと思ふ。容貌は如何に醜くても、醜い女の特有性なる惡い性癖が無くて、心を清く美しく有つて居さへすれば、其の

人は即ち看護婦として、世間の一部から神様の如くに敬愛されやう。感ずべき逸話を有つて居る看護婦が、十人並劣つた容色の人に多いのも、敢て怪しむに足らない。

片笑靨の野村さんなどは、美人でもなく醜婦でもなく、世間並の唯の娘と云ふに過ぎないが、此の後何う云ふ風に成り行くであらう。三週間の間、朝な夕な熱を檢て貰つたり、脈を取つて貰つたり、三度三度の飯の給仕から、大小便の厄介までかけた人とて、いざ退院と云ふ今日になると、何だか其の行末が氣にかゝる。本人は平氣なもので、僕の樣な病人を、病院の一室に送迎して、判で捺した樣な任務に幾春秋を送るのを、定まつた運命と觀じて居やうが、僕は其の前途を考へずには居られない。看病し介抱されたのも、淺からぬ何かの緣であつ

たとすれば、かりそめの遭遇もあだてなく、無意義でなく、其處に何等かのローマンスを讀みたい。今日斯うして別れて了へば、何時の日かまた相逢ふべき、これが永久の別れになるかも知れないが、それも亦後の世の意味ある思ひ出である。今も尙十年前の「廊下の曲り角」を思ふ樣に、十年後には、其の「片笑靨」を思ふの日があらう。

三週間の病院生活は、隨分苦しかつたけれど、百圓の金を費つても、尙償つて餘あるのは、病院に於ける靜寂沈思の興會であつた。新聞記者の樣な、日夜の別なく活動する種族には、ものを考へる時間が、容易に廻つて來ないものだが、僕は病院へ入つたお蔭で、大分僕自身を內省する事が出來た。病氣の種類が、僞道德家の群に同情を惹き難いが爲めに、種々と取沙汰されたかも知れないが、そんな事は頭から問

題にならない。たゞ大に考究すべきてあつた「死」の問題に就いて、其の外郭の一端にも觸れ得なかつた事を、返す返すも殘念に思つて居る。信仰とか死とか云ふ問題は、聖書やお經を讀んだ位てはウソて、身自ら其の境に落ちて見なければ、動きの取れぬホンとの事が判るものては無い。

世間は廣く人は多いけれど、愛すべきものは、たゞ我が身と我が妻子のみてある。僕も樣々な事が原因して、長い間、自個虐待の生活を送つて來たが、人間も病氣をしては駄目だ。月並てはあるけれども、將來大に自重自愛して、自分の爲めに勉强しよう、可愛い三人の男の子の爲めに働かう。未だ卅六歳だ、僕の舞臺はこれから幕が開くのだ。大阪は何うか、——考へて見れば、やはり東京の方が好い。——

荒物屋の二階

去年の暮、東京朝日新聞紙上に、「新女優」題する續物を書いた時、私は芝區琴平町附近の「荒物屋の二階」で、初めて帝劇の新女優白井壽美代に逢つた。當時、帝劇附の新女優と云へば、華やかなもの丶代名詞かの如くに思はれて居た時分の事とて、白井壽美代が「荒物屋の二階」に住て居るのを見て、私は何となく異樣の感に打たれた。「女八人」の中に新女優を書くに就いて、其の題名を「荒物屋の二階」としたのは、實に其の折に得た一種の興味に因るので、篇中の事實は白井壽美代の過去現在と、何等の交渉關係が有る譯では無い。「荒物屋の二階」に住む新女優を書くがために、累を一面識しか無い白井壽美代に及ぼすを恐れて、此の段、明かに表明して置きます。

一、お師匠さん

秋月の娘が新女優に爲つた——と云ふ通知を、私が故郷の石井君から受けたのは、恰度去年の十二月、東京朝日新聞に、「新女優」と云ふ續物を書いて居た折であつた。

これまで種々書いた續物の中でも、私は「新女優」に特殊の興味を有つて、出來る事なら詳しく四五十回も書いて、今の「新女優」に對して、動きの取れない社會的批判を下さうと試みた。大に氣乘もして居たし、材料も八九分まで集めて居たし、文章も苦勞せずにズン〳〵書けて居たに、私は十四回目が新聞に出る頃から、身動きの出來ない病氣に罹つて、遂にそれ限り中絶して了はねばならぬ事になつた。新聞

の續物が中途から掲載されず、尻切トンボになる例は、決して珍しい事ではないが、記者その人の一身上の都合で、折角書き初めた續物を中絶するのは、社に對しても讀者に對しても、實に申譯の無い事の極である。

私の書かうとした「新女優」の豫定項目の中で、頗る大に攻撃し樣と思つたのは、新女優中の人氣者たる森律子を出した、跡見女學校の校長跡見花溪女史の態度であつた。跡見校長は、森律子が女優養成所の女優募集に應じて、卒先して其の生徒となつた前後から、若い娘が新女優になると云ふ事を、女一代の救ふべからざる墮落の樣に憤慨し攻撃した第一人である。律子が女優になる決心を齎して、恩義ある「お師匠さん」を母校に訪ねて、泣いて「藝術の神に一身を犧牲に供へま

す」と云つた時、お師匠さんたる花溪女史、及び女史を中心とする教師の面々は、眞綿で首を絞める樣な態度で、律子が女優になる事を、且つ憤慨し且つ冷笑し且つ漫罵した。哀れ律子は自分の思ふが儘に振舞つて、女優養成所の生徒と爲つた爲めに、母校の校友會名簿からは除名され、出身者の交友團體たる泉會からは、其の會員たる資格を刪除された事は、其の當時の新聞紙が、異口同音に傳へた所である。

然るに女優になつた律子は、相當の紳士を父とし、相當の實業家を親戚として、社會的好奇の眼を惹くに足る十分な資格を有つて居たのみならず、其の晴やかなる容色と、陽氣なる藝風とは、何時しか群女優の中から傑出して、世間から彼是と取沙汰される樣になつた。舊き道德に囚はれた古物に等しい女教育家の眼には、この社會的一現象が

如何に映つたか、兎に角「跡見のお師匠さん」の態度は、月日が經つに從つて段々變つて來た。律子が女優になつた當時には、其の出身校たるの故を以て、跡見女學校の名聲、信用、浮沈にも影響するかの如くに取沙汰したものが、何時しか律子の女優たる境涯を是認したのみならず、これに接近しこれに迎合して、律子を出した事に依つて、跡見女學校の誇とするかの如き態度を見せる樣になつた。由來、私立學校を經營する多くの教育商人に、教育上の主義方針が確立して居ないのは、敢て怪しむに足らぬ事であるが、然し一律子に對する跡見の「お師匠さん」の態度は、餘りに急激な變化であつた。若い女の律子はそれを好い事にして、好んでお師匠さんの許に出入し、自ら泉會の花を以て任じたであらうが、それをまた好い事にして、律子を跡見女學

校出身者中の花形として遇つた花溪女史の態度に至つては、女子教育家として憤るべく嘲けるべく悲しむべく笑ふべきである。

跡見花溪女史と云へば、兎に角女の教育家仲間では、押も押されもせぬ第一人かの如くに、一般世間の俗衆から認められて居る人である。從つて其の人の生徒に對する態度や、出身者の處世上に對する意見と云ふものには、何となく標準的な所があり、代表的な所がある樣に認められて居る。「お師匠さんが律子の女優になるのに反對された」と聞いた時、少くとも其の生徒達の迷い易い心の底には、「女優になるものでない」と云ふ一事が、淺からず植え付けられたに違ひ無い。「お師匠さんが近頃は律子さんを歡迎してよ」と知つた時、少くとも其の周圍の若い娘達は、美みの眼を以て律子の一擧一動を眺めたに違ひない。

たとへ時世の潮流と迎合せねば立行かれぬ教育商人とは云へ、跡見花溪女史は斯うした態度の變り方に依つて、生徒達の一部に何の權威もなく、何の信望もなく、何の勢力も無いものとなつた。私は跡見花溪女史の森律子に對する此の有様を見て、女流教育家とは云ひながら、餘りに俯甲斐なく餘りに主義定見が無いのを、實に情無い事に思ひ、腹立しい事に思つた。

女優になるのが惡い事だと最初に思つたならば、何故何處までも其の意見を持して、動かないで居なかつたてあらう。女優も亦若い女の行くべき道の一つて、職業としても藝術としても、價値あるものと思ふならば、何故最初から賛成しなかつたてあらう。新女優が未だ海のものとも山のものとも判らず、世間のこれに對する態度が曖昧な時に

は、教育家に特有な理窟を列べて、墮落呼ばりをして置きながら、新女優が何うやら此うやら舞臺のものとなつて、世間からヤンヤと喝采される様になると、掌を覆す様に「品行さへ方正なら女優も亦結構ですよ」と云ふに至つた。私は其の不見識無定見を大に嘲り笑つて遣る筈であつたに、幸か不幸か「新女優」一篇は、僅かに十四回を公にしたのみて、尻切トンボて終つて了つた。

秋月の娘お道が、新女優に爲つた——との通知を、國の石井君から受取つたのは、私が「新女優」の運命に就いて、こんな事を種々と考へて居る時であつた。

二、秋月のお道

石井君の手紙は簡短にして、委曲を盡して無かつたけれど、秋月のお道が女優に爲つたと聞いて、私は心中窃に合點する所があつた。

新聞記者にならざる以前、齡二十二にして國を出たきり、足掛十五年の長きを故郷の山河に背いて居る私は、故舊から來る折々の消息に、胸つぶれる樣な事が澤山ある。岡山で中國鐵道に乘換へて、津山へ中途の福渡驛に下車し、旭川の流に浴つた山々の麓を、人力車に賃して七里餘も上らねばならぬ程の、山と山との間に挾まれた海無し國の小さな町にも、十五年の春秋には樣々な悲喜劇が演ぜられた。私が其の小さな町の役場に勤めて、衛生係の下役になつて、傳染病の家へ清潔法施行の檢査に行つて居た頃、五六歳であつた秋月の娘お道が、今では妙齡の娘になつて、東京に來て女優に爲つたと云ふのだもの、月並

てはあるが、時の流は水よりも速く、また夢よりも果敢い。

私の町で秋月と云へば、五つの指に折られた大金持で、酒と醤油の釀造で近在に聞えた舊家の一つであつた。お道は其の家の二番娘に生れて、近所界隈から近在郡内を數へても、一二を下らぬ美人に育つて、岡山の山陽女學校を卒業するまでは、幸福なお乳母日傘の月日が續いた。幼いながらも色白の丸顔で、髪の黑い肥り肉の笑顔好し、「秋月のお道さんには、好い運が廻つて來るぞな」と、町の女達が取沙汰して居たのを、ツイ昨日の樣に思つて居たが、何時の間にか十五年の月日が經つた。鼻垂れ小僧の泣き蟲の弱い子であつた私が、今では十八九貫もある程に肥滿して、三人の子の父と爲つたのだもの、五つ六つのお道が妙齡の娘になつて、新女優の群に入る樣な時節になつたのも、

別に不思議でも何でもない。僅に電信が通じて居たのみの小さい町にも、今では電話が架設され電燈が點つて、一二年後には輕便鐵道が開通すると云ふ世の中になつたのだもの、女優志願の娘が東京に飛出して、天晴れ藝苑の花と唄はれ樣と悶掻いて居るのも、敢て奇怪至極の事ではない。

それにしても彼の秋月の娘が、東京に來て女優になつたとは、夢の樣な事件である。十五年前に別れたのみで、其の後の消息を詳しく知らないが、山陽女學校を卒業した以上は、然るべき緣を求めて、人妻にでも爲つて居ようと思つて居たに、それが女優に爲つたとは何うした譯であらう。國から來る折々の消息に依つて、お道に就いて知り得て居た私の智識は、秋月の家が段々左り前になつて、家倉を他人の手

に渡した事と、お道の兄が惡い女に關り合つて、行方不明になつたと云ふ唯それだけの事であつた。娘になつたお道の思想が、何んな風に變つて居るのか、何うした事件が動機になつて、女優にならうなどゝ志望したのか、十五年の月日の隔りは、お道に就いて何の知る處もなく、今日に及んだ。其のお道が女優になつたと云ふ石井君の手紙を見て、私は驚きもし怪しみもしたが、考へて見れば別に不思議な事でも何でも無く、美しい容色を有つた若い娘が、さうした道を選んで進むのも、今の時節であらうと合點した。說教にもお經にも議論にも講話にも、何一つとして權威の無い世の中に、人々はたゞ自分の思ふ儘に振舞つて、其處に安心立命の地を求めるより他には、何うする事も出來ないのが今の時節である。秋月の娘お道が女優に爲つた裏面に、何

んな理由が潜んで居るにせよ、私はそれを「跡見のお師匠さん」の様に、頭から墮落呼はりもしないが、また「女優も結構ですよ」などゝお座なりを云ひたくない。

女優になつたとのみて、帝國劇場に出て居るのか、有樂座附になつたのか、或は松竹の方へ合格したのか、「秋月道子」の名は、未だ女優の名簿に出て居なかつた。固より一二年の修業を終へて、初舞臺に滿場の視線を惹く時には、親に附けられた名の他に、花園菊子とか星野露子とか、風情ある藝名の中に隱れるのが例てある。美作の山中から都會へ飛出した「秋月道子」も亦、新女優らしい藝名の中に、自分が歩いて來た過ぎ來し方の總體を隱して、新しい門出に就いて居るのかも知れない。帝劇第一期の女優達が、その本姓本名を藝名にして、舞臺

に出て居るにも拘らず、それから以後の女優達は、多く第二の藝名を附けて、舞臺に現れる樣になつた。從つて「秋月道子」が女優に爲つても、其の本姓本名を名乘つて居ない限り、何處の劇場へ出勤して居るか、容易の事では判らう筈がない。

「新女優」を中絶した私は、其の後病氣の經過良しからず、病院窓下に呻吟して忙しい師走を送つた。國の石井君からは二度目の手紙が來て、「秋月の娘は女優になつたけれど、今は病氣のため何座へも出勤せず、赤坂田町の木下と云ふ家へ同居して居る」と知らせて來た。同じ山國に同じ小さな町に生れた因緣があるばかりて、僅に面識があると云つても、お道は私の顏さへ覺えては居まい。一度訪ねて行つて、何んな風に暮して居るか、何んな風の女に成人したか、逢つて種々と昔

話をして見たいと思つて居る内、其の年は珍しい大雪の寒さに暮れた。

新聞に書かうとした「新女優」の問題は、それきり忘れ果てゝ了つたけれど、私は更に「秋月道子」を中心として、新女優の運命を考へねばならぬ様になつた。

三、家庭の事情

先づ前文御免遊ばせ、名も無い田舎の名無草が、突然、花の都に無くてならない花形の貴嬢に、こんな手紙など差上げて、道理の無い事だけに、封も切らいて破つて焼いて、見向いても戴けなくッたつて、私は悲しくは思ひますが、決して〳〵おうらみは申しません。

御繁雑な御職務柄、こんなつまらぬ田舎乙女の繰り言など、御覧下

さる御暇も無いとは存じますが、ま一通りお聞き下さいましたら、どんなに〳〵よろこびに胸おどらしませうやら、お手紙差上げるに就きましては、誰様か、貴嬢にもまた私にもの知り人に御紹介を願ひまして、お頼み致す事の正當なことは、ようく存じては居りますけれど、田舎人の悲しさ、百里と隔つた御地には勿論、貴嬢に近い様な知人は一人も持ちません、單に昔クラスの一人二人が、御地最高の學府に遊ぶ位のもので、そんな事て此の非常識な禮儀もわきまへぬ失禮なことを致しました様な譯、どうぞ事情御察し遊ばして、御立腹遊ばさぬ様にお願いたします。

貴嬢に對しては、眞に御迷惑な事て御座いますが、實は私貴嬢に御相談が願ひたいのて御座います、私、今年貴嬢と同じ年の二十三にな

ります、地方の女學校を卒業しましてこゝに數年、普の人の婚期を外に見て、こうしてじっと親の懷にかぢり付いて居るのは、譯のある事なのです、まア私とした事が自分の傳記めいたことを書きかけまして、見も知らぬ貴孃、然も自分とは錦の帶の帶側と河内木綿との差ほど相違のある貴孃に、潛上と云ひませうか突飛と申しませうか、それを知つて書く私、慘めだと思召したら一通りお聞き下さいませ、御迷惑をお察しまして、成るたけザッとに致します。

生れは市内二流の商家、子供時分から餘り物質上の事には事も缺かずに今日まで參りました、十八の年姉が嫁ぎまして、母のない私は卒業するなり年若い妹や弟に無くてならない家庭の人となりました、その内病氣勝の弟に家督を斷念した父は、どうぞ私に養子を取つて×

×の家名を襲はせる思案を定めてしまひました、さア何うしませう、私は、私は、商家が厭て〳〵ならないので御座います、別に大した意味も無いけれど、徹頭徹尾一生を商家の御新造さんとしては暮したくなかつたのです、奥樣とか御新造樣とか呼ばれるのを嫌ふ虛榮ばかりではありません。

それから二十二の昨年まで、どんな養子を持つて來られても、たゞ厭だ〳〵の一點張で、年取つた老祖母を泣かせ父を困らせました、どれほど私が不孝の子でも、多くの姉妹の中から一人選んで、家督を繼がせやうとする親心に、何うして明らさまに自分の心狀が打明けられませう、手古摺つた上句は私の操行上に疑念をはさみました。勿論根も無い事、とう〳〵年の若い割合に今の新らしい空氣を吸つた叔父に

計りまして、父も根まけして、下の妹に世をゆづることに定めました。

一難去つて一難來るとでも申しませうか、私の事が何うか此うか片付いたと思ふと、今度は姉が病氣で嫁入つた先から歸りました、一年ばかりはブラ〳〵して居ましたが、其の内强度のヒステリーになりまして、とう〳〵離別の悲劇を見る樣な始末、姉には一人の可愛い良人にも替へ難い樣な男の子がありましたが、それにも黑髮引かれる思で別れて……、あゝ何と云ふ無慘な口惜しい義兄の心でせう、わけもなく笑つたり怒つたり、罪も無い自分に當り散したり、そんな時には餘計に捨た人を恨みます、病氣だから歸す、浪子は病氣を姑に嫌れましたが、夫の愛は未來永劫變りませんでした、それも病氣の原因は何で

せう、町内切つての難かしい舅姑につかへて、氣難かしい良人の氣を取り兼ねて、大體が氣の小さい姉の腦は、無慘にもザク〳〵に踏みにじられました。

自分の姉をほめては可笑しう御座いますが、姉は全くの美人です、妹の私どもとても傍へも寄れません、町内切つての美人と言ふ言葉は、能く聞くことです、こんなこと申すのも、餘り姉の現在が氣の毒ですから……私は此の時、男の心と云ふものは、本當に解らないものと泌々思ひました、それからふッつり人の心殊に男の心なんか當には出來ない、どんな小さい事でも生活に事缺かねば構はない、獨立がしたいとそれ計り考へて居ります、こんな事はその時からでも有りませんでもう學校を出る頃から、始終念頭を放れない事なんですけれど、

この時この機會に接して心はかたく〳〵定りました、が困つた事は其の獨立難、今頃また二度の勤の袴はいて、小學校の教師なんかは死んでも厭です、さうかと云つて文筆ではとても活きられない、技藝は尙いけない……とこゝに思ひ及んで、第一に念頭に浮ぶは、貴孃方の現在て御座います。

尙これ計りては有りません、母の無くなつてこゝに七年、第二の母も持ちまして、二十三の娘と割合に若い母とは、何うかすると面白くない事が度々起ります、それにあくまて舊道德舊精神に囚れた家庭、こんなこと申すと今時流行の自覺呼はりの樣て、まるて人眞似して居る樣て厭てすけれど、御相談申し上げたいと申すのは、こうて御座います——。

四、女優志願者

今、私が自分の頭の革命のため、自分は自分の意志の通り處決するのてす、と父の前に心の發表を致しましたら、父の驚愕、立腹、そんな事も最う覺悟はして居りますが、そんなにして父を捨て出た私の未來、一身を賭して致すに出來ぬ事はない、精神一到何事不成、先天的劇道に對して天才の無い者ても、不屈の態度て向ひましたら、或る程度までは進み得られるものだらう、と存じますが如何て御座いませう、自惚なんて御座いませうか。

貴孃の御日常等は、雜誌などては見逃がさないつもり、それだけ貴孃の劇道に對する御多忙も能く存じて居ります、私も自分の身を動か

すと云ふ事は、あくまで實行いたす心組、とてもは駄目なので御座いませうか、私のくわだては、文が拙くッて思つてる事がちつとも云ひ表されなくッて、口惜しくつて仕方がありません、御返事なんて、僭上とも失禮とも、そんな言葉では表はせない事なのですけれど、たゞ憐れな一女の死活問題として、氣の毒と思召したら半紙の切れはしにでも、たッた〳〵一言、私の志望に對する貴孃の僞の無いお心の聲を、たつた一言聞かして載きたい。

まわりくどく申してお解り難う御座いませう、私は今度、附屬技藝學校に入學致したいのて御座います、いらざる事ですけれど御參考まてに申上ます、齡は前申す通り、學校はそれても人に美まるゝ位置を四年間保つて、正當に卒業致しました、規則にある容貌はちと申上げ

難い事ですけれど、何うにか自覺が御座います、身體今までは健康、身長五尺餘、舞踊皆無、琴は古今ぐらゐまで、三味線は上歌と云つて琴と合奏する方を少々、近頃は家て一寸した長唄物や端唄ぐらゐ習つて居ます、こんな自分の勝手な事に、とても〳〵お返しなど戴けやうとは存じませんが、それてもあれだけの中の一人、自分の見込んだ方正則に學校を出た新しい方……あゝ何と云はう今の私の心、暫くは郵便の聲に胸おどらして待つて居ます。

何も彼も今の處、事を發表するまては、全部家庭の人に秘めたく、若しも〳〵萬に一つの望のお返しが戴けましたら、東京淺野友子よりとして戴きたく、某文學士夫人に親しい方が御座います、さらば。

名もなき者　△　△　△

森律子様

ペンの走り書などで、その上心がつらくつて、字が先走りばかり致したがり、お讀みにくい事と存じ上ます、あしからず。

帝劇の女優森律子の許へは、見も知らぬ人から出した手紙が、毎日五六通から十餘通位舞込むさうてある。演藝の批評を書いたもの、心のたけを口說いたもの、弟子入を賴むもの、女優になりたいと申込むものなど、見も知らぬ男女の手紙て、小い手文庫が何時も一杯になると云ふ。こゝに掲げた手紙も亦、去年の秋、名古屋の或る女が送つた女優志願の手紙て、廻りくどい變な文體てはあるけれども、これを女優志願者の代表的手紙として見る時、其處に何とも云へぬ一種の興趣あるを覺える。

漸と女學校を卒業した位の、生學問を覺えた若い女の一部が、何んな事を考へて居るか、此の手紙は其の一面を說明したものてある。律子は此の手紙を私に示した時、例の派手な笑ひ方をしながら、

「こんな手紙が毎月四五十通位は參ります、字の上手下手や文章の文句て、其の人の教育程度や人柄も判りますが、妾は一々御返事を差上げる事が出來ないのて、お氣の毒に存じて居ます。殊に此の手紙の方などは、女が獨立自活して行く華やかな道の一つとして、女優をお選みになつた樣てすが、出來る事ならばお父樣の意見に從つて家庭の人となられる方が幸福かと存じます」

と云つて居た。舞臺に立つた姿ばかりを見て、若い女は女優の境涯を美み望む樣子だけれど、女優も一つの職業である以上、舞臺上の苦心

も多ければ、生活上の苦勞も並大抵ではあるまい。そんな蔭の苦しさ悲しさを知らずに、女優とし云へば若い美しい女の、當然辿らねばならぬ道の樣に心得て、志願者の群が段々增加して來るのは、實に嘆くべき一現象である。律子の許へこんな手紙を送る女が、段々多きを加ふる毎に、女の道は日に月に頽廢して、遂には其の行く處を知らぬ樣にならう――と、道學者らしい考へを起した事もあつた。

それにしても、秋月のお道は何んな考へを抱いて、新女優の群に入つたのであらう。律子に前の樣な手紙を送つた女とは、似ても似付かぬ境涯に在りながら、何うして女優になつたのであらう。生學問ある今の若い娘達は、自分の言ふことが爲ることが、たとへ邪道に近い事柄でも、それに種々の理窟を附けて、自分で自分を僞るのみならず、人

を嘘き世を欺く術さへも心得て居る。お道も亦名古屋の女の樣に、「家庭の事情」を眞向正面に振りかざして、虚榮に落ちた自分の心を欺きながら、「新女優」を女の行くべき正しい道と眺めて、憧憬れ彷徨つて居るのではあるまいか。

十五年の昔に別れたきり、同郷の生れと云ふ以外に、二人の間には何の因緣も無いけれど、私は一度お道を訪ねて、娘になつた其の樣子も見たいし、何うして新女優になつたか、其の後の身の上話も聞いて見たい。そして新女優の前に横つて居る陷し穴を敎へて遣つて、出來ることなら山綠に水白い故郷へ歸らせたい。

五、最初の手紙

私はお道を訪ねる前に、豫じめ手紙で其の在否を確め旁々、日頃から新女優に就いて考へて居る一端を、忌憚なく書き送つて見た。私が七八年前から東京に來て、朝日新聞社に勤めて居る位の事は、お道も知つて居たてあらうが、突然の此の手紙を見ては、種々の意味に於いて、さぞ驚いた事てあらうと思ふ。

——拜啓、其の後は絶えて御無沙汰に打過ぎ居り候、小生は、十五年前の霜寒き朝、妹を連れて國を出て候まゝ、未だ一度も歸省したことなく、從つて御一家の樣子なども、時折の風の便りに承知致し候のみ、お前樣が東京に出られて、新女優にお爲りなされし由は、先日石井君よりの來書に依つて、初めて承知いたし候ようの次第、先づ以て益々御成人御壯健の段、何よりも喜しく存じ上げ候。

小生が故郷の町役場に勤めて居た頃は、お前樣も未だ五六歳のいたいけ盛りにて、黑い髪をおぼこにした可愛さは、今も尙眼に見る樣に覺え居り候、近隣に類稀なる美貌を有つて、町內屈指の舊家に人となられ候ことゆゑ、定めし良緣を得て他に嫁ぎ、今頃は幼い人の母となられ候とのみ思ひ居りしに、東京に來て女優に爲つて居られると承り、一時は何かの間違ひではないかと且つ怪しみ且つ疑ひ候、一度御訪ねして十五年振りに御目にかゝり、いろ〳〵と其の後の御樣子など承りたけれど、取敢ず手紙にて伺ひ申候。

女優になられ候上は、何れ生れた儘の「秋月道子」ではなく、何とか然るべき藝名を持つて居られる事と存じ候、石井君から久し振りの手紙が來た當時は、小生も新女優に就いて種々と考究せし折柄なれば、

帝劇、有樂座、松竹などに就いて、それとなくお前様の事を探り候へども、更に何の手係りもなく打過し候内、石井君より二度目の手紙に依りて、近頃は何の劇場へも出勤されず、病氣にて休んで居られるとのことを承知いたし候、何時頃上京して、何時頃から女優に爲られたか、何事も承知せざれども、東京にての御病氣は何かにつけて心細き事のみ多かるべし、それにしても近頃の御容體如何、郷里よりは折折消息有之候哉、人間は何を爲るにも身體が第一、病氣をしては駄目に候、この上とも大に自愛して、幸福多き月日を送られたく、望み多き世を過されたく、蔭ながら祈り上げ候。

今は舞臺に立つて居られずとも、女優に爲られ候上は、健康回復の日を待つて、更に大に發展さるゝ事と存じ候、町内屈指の舊家たる秋

月の二番娘が、何故に新女優になられたか、多少の教養を受けたるお前様の事なれば、堅い決心と覺悟の上にて、進んで女優の群に投ぜられた事と存じ候、世間の娘達を見渡すに、女優にでも爲らうとする者の理由とする所は、美しく貴き藝術の神の前に、一身を供へんとの趣味性より出たるものと、華やかにして榮ある職業として、生活のために選んだものとの二種ある樣に覺え候、趣味のためにするも、生活のためにするも、所詮は女優その者の境涯に憧憬るゝ虛榮に外ならず、と世部の一部には極論する者あり、女優も亦世間の要求に依りて生れたる職業である以上、決して卑しむべく蔑むべきに非ざれども、若しお前様が女優に爲らざる以前、小生に相談せられたならば、小生は斷じて同意を表せざりしに候、然し最う爲られた上は是非もなし、群女

優の上に秀づるの名優たり能はずとも、新しき女優としての技藝を研究し、新しき女優としての操行を持して、何處までも健全に勇往邁進の程を希望いたし候。

忌憚なく申せば、現在の日本に女優らしい女優は一人も居らず、皆申し合せた様た未成品揃に候、未だ四五年は一向專念に技藝を修めて、初めて舞臺に立たねばならぬ人々が、劇場の利益の爲めに舞臺に晒され候のみならず、如何にも一人前若しくは一人前以上の女優なるかの如くに遇はれた結果、世間の俗衆も亦これを完成したる女優として受取り、彼是と話題の中心にしたり、問題の材料にして取沙汰するに至り候、若い娘達の事なれば、劇場と世間からチヤホヤ取沙汰されると、最う一人前の女優になつた様な心持になつて、肝要な技藝の修養を忘

れて了ひ、未熟極る未成品たるを恥ぢもせず、女優の様な顏をして歩き廻る様、眞に滑稽にして悲慘の極に候、果は様々な誘惑の手に勝つこと出來ず、二三の者を除いては、料理店や待合入りをして平氣て居ると云ふ有様、藝術の神様もこんな有様ては、痛嘆し慟哭し給ふべく候。

何れ近日、御訪ね致し候上、小生の「女優論」なるものを詳しく申上ぐべく候、別れてより十五年の月日を過し候ことゆゑ、途中てお逢ひしても、お互にそれと知らずに行き過ぎ候ことなるべし、美作の小さな町から出た唯一人の女優として、この上とも御自重を望み候、拙著「淪落の女」別封にて贈呈、匆々——。

この手紙を出してから、私は毎日返事の來るのを待つとしもなく、

待ちながら、十五年の月日が育てたお道の様子を、種々と思ひ浮かべて見た。母も姉も容色好してあつたから、お道も亦その系統を享けて、丸顔の肉付き好い派手な美人に爲つたであらう……。

六、十五年ぶり

五日目の夜、道子から返書が來た。――お手紙懐しく拜見いたしました、幼心にも先生の事は能く覺えて居ます、一二度新聞社の方へ電話を掛けましたけれど、何時も御不在の時ばかりでした、其の後お訪ねしたいとも思ひました、けれどわざと遠慮して居ました、妾の只今住んで居ます家は、田町の木下と云ふ荒物屋の二階です、六疊と四疊半の二室も取散し勝て、眞にお恥しいと思ひますが、御寸暇の節お訪

ね下さいまし、種々とお話も申し上げたいし、御意見も承りたいと存じます――

私は其の翌る日の夕方、風月堂で買つた洋菓子を手土産にして、田町の荒物屋の二階へ、秋月の二番娘たる女優の道子を訪ねた。私が二十一二て道子が五六歳の頃別れたきり、十五年の月日を經た再會だもの、芝居ならば幕外へ、「この所十五年相經ち申候」との掲示が出る所である。大臣や博士や金滿家を訪問しても、前科者や立ン坊や乞食と語つても、ビクともしない新聞屋さんも、お道さんを訪ねて、狹い荒物屋の段梯子を上つた時には、何だか知ら胸の躍るを覺えた。

荒物屋の構へは小さくて、狹い店には賣品の粗末な臺所道具などが、雜然と置いてあつたが、それでも二階は掃除が行届いて、上つた突當

りの四疊半には、桐の箪笥やら長火鉢やら茶棚やら。宛然若夫婦の新世帶でも見る樣な心地がした。六疊の方には小い床の間があつて、松に日の出か何かの懸軸に、福壽草の鉢植を置き、桐の角火鉢を中央にして、燃える樣な緋メレンスの座蒲團が二つ、捲莨の灰皿まで置いてある。室の一隅には小い硝子戸の本箱があつて、其の中には「日本演劇史」とか、「市川團十郎」とか、「演劇十講」とか云ふ本の他に、「我輩は猫である」に隣して、「思ひ出の記」がある、「情死の研究」がある。「演藝畫報」や「新小說」や「早稻田文學」や「新婦人」などの雜誌類も、所狹いまでに詰め込んであるのが、如何にも若い女學生の部屋らしい感を起させた。其の本箱の上には、松井須磨子のノラに扮した寫眞を飾つて、小い香水の瓶と、可愛い人形が一つ横つて居た。

荒物屋の女將であらう、四十前後の無愛想な顏をした痩せた色の黑い女が出て、

「秋月さんは、先刻ちよいと其所まで出られましたが、直ぐにお歸りの筈ですから……」

と云つて、私の顏を睨む樣な眼付きで見た。二階住の夫婦暮しに差支へ無いだけの、炊事道具まで揃つて居る樣子だが、お道は未だ獨身生活を送つて居るに違ひない。私は其の部屋に坐つて、一人で捲莨を吹かしながら、お道の幼な顏を思ひ起しては、今の樣子を想像して見て何だか知ら胸の動搖を覺えた。待つこと十分二十分、やがて階下の方て、

「お客樣？、さう！、何時入らして……」

と云ふ若い女の聲が聞えて、階梯を上る衣摺の音が輕く響いたかと思ふと、女は四疊半の方から顔を出して、眞紅になつて極り惡る氣に、

「松崎さんて御座いますか、失禮いたしました」

と叮嚀にお辭儀をした。私も心持顔を紅くして、

「お道さんてすか、お久し振りてすなア」

と云つて、初めてお道の方へ正面を切つた。

二十一二と云へば、女も最う成熟し切つて居るが、然し幼少い頃の面影は、眉か眼か口許かの何處かに殘つて居るものてある。お道は色白の丸顔で、眉が濃くて眼が大きく、額が狹くて生え際の好い娘に成人し、銀杏返しが好く似合つて、如何にも初心な娘々した所がある。電車の中て袖擦り合つても、お互にそれと知らずに行き過ぎて了ふほ

どに、變り果てゝは居るけれども、それても幼い頃の面影は、その眉と口許とに殘つて居た。お道は四疊半の方から、茶やらお菓子やらを運んて來て、俯向勝に火鉢の灰を弄つて居たが、

「最う足掛十五年になりますかねえ。妾の覺えて居た貴郎は、痩せた弱々しい方てしたが、何時の間にそんなにお肥滿になつたのてせう。餘りの變り樣てすもの、何處てお目にかゝつても、貴郎だと氣附かう筈が御座いません。妾も最うお婆さんになつたてせう」

と云つて、男の心を動かす樣な眼つきて微笑んだ。

「五つ六つてあつたお道さんが、こんな娘さんに爲つたのだもの、私だつて肥滿るのは當然てすよ。お道さんの世界は、愈々これからだけれど、私は最う三十六てすからなア、考へて見ると厭になる……

子供も三人出來たし……ねえ」

「そんな事は御座いません、殿方こそそれからが盛りてすわ。妾など、最う迷つて迷つて迷ひ拔いた揚句、女優なんかに爲つて了つて、ほんとに詰らないと思ふ事がありますけれど、思ふばかりて他に仕樣がありませんのよ。國の方は、さぞ屹驚なさつた事てせう……、いろ〳〵と評判されて居るかと思ふと、ほんとに厭になつて了ひますわ」

十五年振りに逢つたお道の言葉には、最う懷しい作州の訛を聞くことが出來なんだ。女優に特有な誇大な笑ひ方もせず、無暗に顏の筋肉を動かして見せもせず、お道には未だ娘らしい所が多かつた。始終控へ目勝に生な娘らしい樣子で、種々の事を話したけれど、話した事柄

には事實よりも說明の方が多かつた。

女優に爲つた事を誇として居る樣な口吻があるかと思ふと、如何にも後悔して居る樣な溜息を吐いて、お道は絕えて久しい同鄕の訪問者を大分手古摺らした。

七、ふる里の話

お道は最う夕飯時てすからと云つて、私が辭退するのも聞かずに、近所の鳥屋から鳥鍋を取寄せて、お銚子さへ添えて出した。

「斯うして二階住居はして居ますけれど、鳥て御飯ぐらゐの御馳走は出來ますわ」

幼な顏を知つて居るとは云ひながら、殆ど初見參に等しい二人は、

同郷の出身と云ふ因縁の下に繋がれて、一つ鍋をつゝき合ながら、且つ飲み且つ食ひつゝ種々の話をした。

私は故郷の話をするよりも、お道が何うして女優に爲つたか、山陽女學校を出てから女優に爲るまで、長からぬ三四年の日記のページを、一々展開げて讀みたかつた。何んな事が動機に爲つて、何を感じて女優にならうとしたか、若い娘には若い娘だけの煩悶もあれば苦勞もある。私はそれをお道の口から聞いて、若い女の心の底に巣ふ秘密の囁きが知りたかつたに、お道の話は、故郷の思ひ出にのみはづんだ。

西原の渡船が大きな木の橋になつたとか、小川の竹籔が無くなつて家が建つたとか、町役場も基督教會堂も新築されたとか、垂水の方へ行く道路が擴くなつたとか、八幡様が大きくなつたとか、第三者にと

つては何の興味も無い事柄でも、長い間故郷に背いて居る私の耳には、それ等の郷土談が、淺からぬ情味を以て聞かれた。荒神坂の足袋屋の娘が嫁入つて、三人の子の母となつて居ること、藥屋の二男が學校を卒業して、眼醫者を開業して居ること、疊屋の長男が賭博を遣つて、二度も三度も監獄へ入つたこと、町には藝妓が無くなつて、曖昧屋が殖えたことなど、お道は事毎に都會放浪者が驚く樣な故郷の話をして、

「貴郎も一度御歸省なさいよ。國へ歸つた所で話相手はなし、二十日も一月も居れば飽いて了ひますが、一週間か二週間ならば、避暑旁旁惡くはありませんわ」

と微笑んだ。病後の私は恐い物でも嘗める樣に、控へ目に飲んだけれど、それでも思はず盃の數を過して、何時の間にか陶然となつた。

「國の話を聞くと、最う起つても居ても堪らなくなりますよ。十五年も歸らないのだから、何とかして一度歸省して、變り果た故郷の山河も眺めたいし、變遷した町の人事も見聞したい。自分の生れた小さな町に自分を置いて、少年時代の夢を繰返して見たり、都會で働いて居る自分の悲慘な姿を、遠くへ放して眺めて見たりするのは、宜い修養の一つだと思つて居ながら、何うも金と時が無いのでね。故山に背くことゝに十五年、遊子空しく風塵に老たり矣、父母の墓も未だ土饅頭の儘なんですよ」

私は泣きたい樣な氣持になつた。お道も二三杯過したのか、顏が火の樣にほてッて居た。

「女學校を卒業して、直ぐ國へ歸つて居ましたら、今頃は何所かの御

新造さんになつて、大きな丸髷を結つて居たでせうが……、妾、岡山で、嫁に行けない身體になつて了ひました。奥樣もありお子達もある中學校の先生と、何うして彼んな事になつたのかと、自分で自分の心持が別らない樣な、馬鹿な月日を送つて居ました。父が迎に來てくれまして、國へ歸つた事は歸りましたけれど、最うお嫁になんか行かないと頑張つて、とう〳〵東京へ逃げて來たのです。妾の樣な女は、女店員にでも爲るか、交換手にでも爲るか、思ひ切つて左り棲でも取るか、女優にでも爲らなくちや、獨身で此の世間を渡る事が出來ないのですもの……」

お道は舞臺にも二三度立つて、役らしい役を演じた事もあるけれど、此の頃は頭が痛くて、二月ばかり休んで居る由を語つた。如何に名優

に爲らうと勉強しても、天分の爲い者は駄目だと諦めては居るが、一度女優になつた以上は、實の無い人氣を博するよりは、名實相伴つた藝名を謳はれたいと云つた。思つた程に容易な事ではなく、舞臺でも樂屋でも世間へ對しても、人知れぬ苦勞の數々が多いけれど、今更廢すのも殘念であると云つた。金や位置ある後援者は一人も得られずとも、自分は自分の持つて居る藝能を資本にして、優勝劣敗の激しい芝居道を歩いて行くのが、定つた運命かも知れないと云つた。長い月日の間には、泣く樣な悲しい事もあらうが、また面白い愉快な事もあらう、それを樂みに、行ける處まで行き、進める所まで進んで見やうと云つた。國の實家からは毎日の樣に、歸れ〳〵と迫つて來るが、半年でも一年でも都會の空氣に觸れた若い女が、何うして山又山の作州の、

彼の小さな町などへ歸られやうと云つた。

「妾は最う家に捨られ、故郷に捨られた身體ですもの、貴郎の樣に歸らうとは思ひませんが、貴郎は是非一度お歸りなさいましよ。女優に爲つた秋月の二番娘が、今では荒物屋の二階に燻ぶつて、新女優劇團組織の準備をして居る位に、吹いて置いて戴きたいわ」

二十一だと云ふけれど、男を知つて居るお道の態度は、酒の微醉に依つて段々荒んで來た。女優に對する意見を眞面目に述べて、賴り少ないお道を鼓舞鞭韃し、放縱なお道を戒飭叱咤して遣らうと思つたけれど、私も最う醉つて居た。二人の間には、又ふる里の話がはづんで、鮎と松茸だけは、何うしても國のが一番美味くて宜い、と云ふ事に落着した。

十一時頃、電車停留場まで私を送つて來て、互ひに「左様なら」と云つた時、何うしたのか、お道はハンカチーフを眼に當て居た。

八、悲慘な運命

お道に別れた翌日、私はまた次の様な手紙を書いて、お道の許へ送つた。

――昨晩は失禮しました、十五年振りにお目にかゝつて、成人された様子も判るし、種々と國の話も承り、何とも云へず面白かつた、生れた年月が違つても、育つた時代が異つて居ても、同郷の人と云へば懐しいし、心が置けなくて宜い、病後初めて飲んだ爲めに、好い氣持になり過ぎて、失敬、失敬。

逢つたらお話し様と思つて居た事も語らず、お聞きしたい事も未だ澤山あつたけれど、それも聞かれず、國の話がはづみ過ぎたので殘念でした、兎に角あなたが女優になられた次第だけは、昨夜のお話で能く判つたが、この上は種々の不平不滿を忍び、四方八方から來る誘惑に陷らぬよう注意して、一向專念に藝道を修行されたい、新女優の相場も大概極つて、藝も未熟なら品行も藝娼妓位のものだと云はれては、第一新女優の新の字に對して、面目ない事ではないか、あなたは何んな事があつても、そんな仲間の中に引込まれぬよう、くれ〳〵も氣を付けてお進みなさい。

文藝協會に於ける松井須磨子や、帝國劇場に於ける村田かく子、宇治龍子など二三を除いて、女優としての存在を認められるだけの個性

を有つて居る者が幾人あるか、利益を第一の目的とする劇場のマネージャーが、若し今の女優に相當の役を振り付け、相應の給金を支拂つて居るとすれば、それは女優としての技藝に拂ふ尊敬でもなく報酬でもなく、たゞ金儲けの機關に使用した使用料たるに過ぎない、世間の觀劇家が女優の群に對して、評判し取沙汰して居るとすれば、それは女優としての技倆を認めた上の事ではなく、たゞ新女優の多くが、若い美しい女であると云ふ理由に過ぎない、あなたは此の點を能く考へて、劇場内部の人々にチヤホヤされても增長せず、一般世間の人々から評判されても油斷せず、藝道の修養以外には、何んな事があつても心を傾けては不可い、私が第一に御注意申し上げたいのは、此の二ケ條である。

九女八を中心とする舊女優の一群や、川上貞奴の周圍に居た女優の仲間に對しては、世間も大した注意を拂つて居ないけれど、あなた達新女優の群に對しては、生れた月日が淺いのみでなく、其の多くが女子教育の校門を出て居るだけに、世間との交渉關係が一通りの事ではない、たとへ女優になつた人々が、女學校出身者中の百分の一、千分の一にも足らぬにせよ、女學校の卒業生か女役者に爲つた、と云ふ單なる事件そのものが、婦人問題にも社會風教上にも、淺からぬ影響を及ぼして居る、殊に世事に疎い若い娘達の心の底に、新女優の存在が何れほどの深さと强さとを以て響いて居るか、森律子に手紙を送つた名古屋の娘でも、或はまた新に女優に爲つたあなたでも、理由は種種あるにせよ、歸する處は女學校を卒業して女優になつても、決して

恥づべき事てないとの、前に有つた事實に動かされたのてはないか、女優になりさへすれば、何うやら此うやら舞臺に出られて、女一人の糊口が出來ると思つて、行路に迷つて居る世間の娘達が、異口同音に女優に爲りたいと叫び、女優の境涯に憧憬れる樣になつては、女の行くべき正しい道には、雜草が生えて蛇が出やう、あなたは何と思ひますか。

大正演劇史の上から云へば、卒先して女優に爲つた帝劇の第一期生には、多少の傳記が殘らうが、これを婦人問題や社會問題の上から見ると、若い女の行くべき道を暗黑にしたのは彼等てある、殊に素性の判らない娘達ばかりならば、世間もさうは驚かないが、中には辯護士にして代議士たりし人を父にして、跡見女學校を卒業した森律子など

が居たのて、其の當時の人々は何れも驚異の眼て見た。自分の學校を出たのみてなく、これを其の儘に放任して置けば、若い女學生達に何んな惡影響を與へるか知れないとて、跡見のお師匠さんたる花蹊女史が、森律子の出入を差止めて、其の名を校友會名簿から除いたのは、一應道理のある處置てあつた、但し跡見のお師匠さんは、お齡がお齡だから耄碌したのか、二三年の月日が經つと、律子に對する態度を變へて、律ちやん〳〵と可愛がり出し、心ある人々から糞味噌の樣に笑はれ罵られた。

女子教育家中の有力者と認められて居た花蹊女史てさへ、一徹な昔の婆さん氣質を捨て、女優としての律子の存在を是認する樣な時代になつた、女優の華やかにして美しい表面ばかりを見て、女優に爲りた